
ア コガレ

落内陽太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ア コガレ

【Nコード】

N2105P

【作者名】

落内陽太

【あらすじ】

亜古賀鈴町あこがれで行なわれるさまざまなアコガレの瞬間。女子高生、古賀かごめを中心に色々な人たちが生活しています。ほのほの雰囲気系小説です。

第一席「試験勉強でキャツキャ」ア コガレ（前書き）

作者のアコガレをみんなの前で発表し、読者様はただ頷くという、アメリカからやってきた新しい概念、それがア コガレ！
勝手ですよ、ああ、勝手ですよ。だけど、それが「ア コガレ」なんだもんしょうがないじゃん。

第一席「試験勉強でキャツキャ」ア コガレ

ほんの少し幸せで、ほんの少し不幸。プラスマイナスゼロ。
なんにもないってことが一番幸せなんだよ。

ここはあしがれ亜古河鈴町。日本の真ん中辺りに位置する、十階以上の建物もない地方都市の一角。

亜古河鈴町の外れに古賀姉妹が住んでいる家がある。

二階建ての家屋に、高校生と中学生の姉妹が住んでいる。

「起きてよ〜お姉ちゃん」

「う〜ん、むにゃむにゃ」

「いくらテスト期間で早く授業が終わったからって学校から帰ってすぐ寝るなんておかしいよ！」

瑠璃はベッドで熟睡中のかごめの身体を揺さぶっている。

かごめは目をこすりながら半身を起こすと、口をとがらせた。

「だって、たまのテスト期間だよ！ 高校生だって休養が必要だよ！」

「お姉ちゃん、明後日からは、たまにしか訪れない期末テストだよ」

「だからだよ！ 夜に起きて、夜中勉強するの」

「も〜、深夜ラジオが目的でしょ」

「ええっ、ちちちち、違うよ」

「ベタな慌て方だね……」

瑠璃は腰に手をあて、小さくため息をついた。

妹の困った姿を見て、かごめは申し訳なさそうに自分の頭をかいた。

「それにせっかく妹が起こしてくれるイベントが発生してるんだか

らあ、もう少し楽しませてよ」

「お姉ちゃん、昨日もゲームやってたでしょ」

「違うよ！ あれは人生のシュミレーションなんだよ！」

布団を跳ね除け自分に迫るかごめに瑠璃はやや気後れした。

す、凄い情熱。(ゲームだけど)

「はいはい。でもいい加減起きないと、今日は皆でテスト勉強する
つて約束したんでしょ？」

「するけど、まだ大丈夫だって。皆も同じ気持ちだよ」『まだ眠
いって』

「誰がだ！」

「ふえ？ 加奈^{かな}ちゃんの声？」

「もう皆が来てるよ」

「ええ つ！」

かごめの周りには既に三人の友人が立っていた。

渋々ベッドから出てきたかごめはさつきツツコミを入れた加奈の
前に立ってため息をついた。

「はあ、加奈のメガネを観ると勉強思い出してテンション下がる
」

「どういう意味だ。それをいうならメガネに映った自分を見てだろ」

「あゝっ、彩香^{さやか}ちゃん、加奈がいじめるよおゝ」

「あらあら、加奈ちゃん、よしよし」

彩香はかごめの頭をなでながら目を細めている。やれやれと頬を
指でかきながら加奈はため息をついた。

「はあ。ホントに彩香は過保護だなあ。なあ、まどか」

まどかは三人のやり取りに関係なくテーブルで勉強を始めていた。

「まどか、お前は本当にマイペースだな」

加奈の言葉も聞こえないようで、黙々とノートに向かっている。
不思議に思って覗きこむと可愛い犬の絵をせつせと描いていた。

「まどか！」

一通り突っ込み終え、ようやく皆が試験勉強をするためにノートを開いた。

自らの気合を入れるために加奈は声をあげた。

「よし、じゃあテスト勉強始めるぞ！」

「ちよつと待った〜！」

「なんだよ、かごめ」

「あのね、その調子で声出して勉強して」

「は？ なんで？」

「勉強のためだよ。ねえ、彩香ちゃん」

「確かに、手で書いて声出して読むと記憶が定着するって言いますね」

しつかり者の彩香の言葉に加奈は納得した。

「なるほど。結構面白そうだな、やってみるか」

「やった〜」

加奈が教科書を声をあげて読み上げると、かごめはうつ伏せになって、寝息を立てだした。

「なにやってたんだよ、かごめ」

「じゃあ、私は睡眠学習ってことで」

「寝るな!!! つーか、私は睡眠学習のカセットか！」

教科書を丸めて加奈はかごめを殴った。

「また、加奈ちゃんがいじめるよお〜」

「はいはい、よしよし」

「彩香、甘やかすな。まどか、お前もコイツになんとか言って……」

まどかはノートに描いた可愛い犬にウツトリしていた。

「まどか~~~~っ!!!」

すかさず、かごめはノートの可愛い犬に近づいた。

「まどかちゃん、それ超カワイイ！ ね、彩香ちゃん」

「ホントね〜」

「つーか、お前ら勉強しろっ!!」

なんでもない人たちが住んでいる。
それが亜古賀鈴町である。

第二席「気が付かずに恥ずかしい事いってた」ア コガレ

ここは亜古河鈴高校。百年近くの伝統を誇る私学。だからといって進学校でもない中程度の学校だった。

二年三組の教室へ猛ダツシユで駆け込んでくる人影があった。

肩まで伸びた髪を揺らせて、かごめは加奈、彩香、まどかの元へ飛び込んだ。

「加奈、かな、カナ、加奈~~~~っ」

「どうしたんだよ、朝っぱらから」

「はあ、はあ、はあ……さっき、肉屋の熊吉に聞いたんだけどさあ」

「熊吉？ 熊井吉野か」

同じクラスの熊井吉野と確認してから、加奈はかごめの言葉を待った。

「昨日は肉の日だったんでしょ？」

「え？ 十一月二十九日、イイニク、つまり良い肉の日だな」

加奈の言葉に、かごめは額に手を当てて、外国人のような大きなジエスチャーで、嘆息した。

「うわ〜、損した〜」

「なにが？」

「良い肉食べなかった〜」

加奈は心の中でずっこけたが、鼻を鳴らして、かごめをからかうことにした。

「ふん、どうせタイムサービス品の肉でも食べ……」

「魚だった〜」

「肉でもないのかよ！」

「日本のヘルシー志向に乗せられた〜」

「知らねえよ！」

「あ〜、損した〜」

落ち込むかごめ。

しかし、何かを思い出したように瞳を大きくさせた。

「はっ。今日は十一月三十日だから、イイサオ、つまり、良い竿の日だ！」

「まさか……」

「今から釣具や行ってくる！ イイ竿を買ってくる！」

「かごめ、ちなみにアンタ、釣りするの？」

「え？ しないよ。なに言ってるの、加奈ちゃん」

「あのなあ……」

加奈はこぶしを握り締め震えている。

対照的にあっけらかんとしているかごめだった。

ただ、かごめはいつもの調子なので加奈はいちいち突っ込むのを止めた。

「にしても、かごめ。大体、こんな平日に釣竿なんて買う奴いるの？ まあ、買うとしたらウチのクラスにいる学校一の釣り馬鹿、浜崎しかいないよなあ」

「え〜、そんなのずるいよ〜」

「アンタ、本当に釣竿欲しいの？」

「……いない」

「じゃあ、いいだろ！ 竿の事は忘れる」

「え〜」

「でも」と前置きをして、かごめと加奈の間に彩香が間に入る。彼女はおっとりとした口調で話をまとめてくれた。

「いらいなかもしれないけど。雰囲気に乗せられて買っちゃうものってあるよね〜。祭りの出店のおもちゃとか」

「確かにバーゲンってだけで何でも買っちゃう事はあるけどさあ……それにしてもコイツは酷い」

ため息をつく加奈を前にして、かごめは地団駄を踏んだ。

「ずるいよ〜、ずるいよ〜！」

「これは多分……損した気分症候群です〜」

「彩香、マジで？」

「マジです。症状としては意味わからないぐらいに駄々こねます」

「くっ、期末テストに向けてのストレスが爆発したか……」

「男子だけずるいよ〜ず・る・い！」

「子供かお前は。しかも浜崎一人だけだって言ってるのに、いつもの間にか全ての男子に当てはめている」

「ずるいよ〜男子だけ竿持つてるなんてずるいよお〜」

かごめの言葉に加奈は急に赤面した。

「釣」を取っちゃだめだろ。

男子の竿って……

発想がそっち方面な加奈だった。

「ちよっ、まつ、その発言は危険すぎる！」

「まあ〜、かごめちゃん。無垢発言」

「おい、彩香、うっとりするなよ。まどかもなんとか言っ……」

まどかは顔を真っ赤にさせて黒板に落書きしている。

黒板にはキノコの絵が描かれていた。

「……突っ込めば地雷を踏んでしまう」

加奈はまどかにツッコミをいれるのを止めた。

「くっ〜、口惜しや〜」

かごめはまだ悔しがっていた。

そこへ、かごめの幼馴染である、なかのまひるの阪野将が通りかかった。

「あっ、阪野だ。阪野お〜」

「えっ。阪野くん……」

加奈は阪野の姿を見て、顔を赤くしてうつむいた。

反対にかごめは阪野の元へ駆け寄る。

「ずるい。ずるいよ！」

「なな、なんだ、いきなり」

突然のことに口を歪ませながら対応する阪野。

彼に対して、ここまでフレンドリーなのは、かごめだけなのだ。

「私にも竿ちようだい！」

「はあ？」

「男子だけずるよ！ 竿ちようだい！ 阪野の竿ちようだい！」

「ええっ！？ ちょおおおお、お前……」

みるみる顔が赤くなる阪野。

阪野とかごめの様子を遠目から伺っていた加奈は、何らかの危険を察知した。

二人がなんか良い雰囲気になっている。

「ちよつと、かごめ。阪野君が嫌がって……」

なんとか阻止しようと、二人へ近づく。

だけど阪野の表情が迷惑というより、恍惚とした表情になっていることに気づいた。

「……嫌がってない」

このおおおっ、バカかごめ！

「ねー、ねー」と無意識とはいえ、阪野へセクハラ発言を繰り返す、かごめ。

しかも彼はその状況にうっとりしている。

これは何とかしなければ。

加奈は瞬間的に教科書を丸め、かごめに近づく。

「こうなったら、強制終了！」

丸めた教科書でかごめの頭をフルスイングした。

軽快な打撃音が教室中に響く。

「ぶごっ！」

「そして再起動ーっ！！」

振り切った腕を返す刀で、もう一発かごめの頭を教科書で殴打した。

「むぐーっ!!!」

あまりの衝撃に目の焦点が合わなくなったかごめ。

倒れこもうとする彼女を彩香が抱きしめ、受け取る。

「はい。おかえり〜」

やがて、正気を取り戻したかごめがポツリとつぶやく。

「あれ？ 何の話してるんだっけ？」

「助かった〜」

胸をなでおろす加奈。

痛む頭を摩りながらかごめは阪野に声をかけた。

「阪野、なに顔を赤くしての？ 明日から期末テストだよ。え？

何で前かがみ？」

「あ、いや……」

なぜ、俺の目には録画機能がないのだ！

なぜ、俺の耳には録音機能がないのだ！

と一人悔しがる阪野だった。

第三席「カレー曜日」ア コガレ

かごめは珍しく机に向かって勉強していた。

さすがに今日のテストの出来がまずく、付け焼刃でも勉強する気になったのだ。

「うゝ、うゝゝゝゝゝゝ」

しかし、三十分後。シャーペンを机に置いた。

「カレーが食べたい」

かごめはいつものことながら、急に思いたった。

ああ、なんか今日はカレーの気分。

テスト勉強そっちのけで、食べたいな甘口。

中辛は駄目だからね！……と、気分はカレーのちライス！

かごめはカレーが好きなもの、甘口しか食べられないお子様であつた。

我慢できなくなつて、自室をでると、お腹を刺激するいい香りがある。

「カ・レ・ー！ カ・レ・ー！」

確かに帰宅時に今日は が食べたいなあと思つて家に帰ると、思ったとおりの夕食だったときテンションがガン上がりである。

「ねー、瑠璃、今日のご飯は何？」

キッチンに飛び込んだかごめは衝撃の現場を目撃する。

コンロに置かれた鍋。グツグツ煮えているそれは……

「え？ えっ？ 何？ お姉ちゃんどうしたの？」

「うわゝ、そっちかゝ！」

かごめは跪き、頭をかかえて天を仰いだ。

まるでロスタイムに点数入れられたサッカー選手のように。

「お、お姉ちゃん。絵に描いたようなガツカリ顔だね……」

「ガツカリしてるんだよ」

鍋の中で煮えていたのは白く、誰がどう観てもホワイトシチューだった。

「カレー気分の時にシチューですよ！ なにこの微妙な違い！」

「カ、カレー気分？」

「ビックリマンチョコ買いに行ったら「ロツテ」じゃなくて「ロツチ」だった気分だよ……」

「お姉ちゃん。その話題は古すぎてわからない……」

といつつ、突っ込む事のできる瑠璃であった。

しかし、かごめのガツカリトークは続く。

「しかもよりによってシチューって。ホワイトシチューって」

「ん？ 冬らしくていいじゃない」

瑠璃の言葉にジト目で見つめるかごめ。

一瞬『確かに』と思ってしまうたのも事実だった。

「もう、瑠璃は情緒がわかってないな！ 女心、いや、お姉ちゃん心がわかってない！」

「お、お姉ちゃん心？」

かごめはだんだん、引っ込みがつかなくなっていくた。

「あーもう、いい！ シチューをご飯にかけて。サラサラ食べるから」

「ちゃんとご飯とシチューは分けようよ」

「こうなったら、シチューでカレー気分に浸るんだあ！」

かごめはカレー皿を取り出し、瑠璃へと差し出す。

「お姉ちゃん、普段『ご飯にシチューかけて食べる奴の気が知れない』って言ってたよね……」

「それシチューじゃないよ。カレーだよ」

「『葉っぱじゃないよカエルだよ』みたいだね」

「あーもう、うるさ い！ もういい」

「お姉ちゃん？」

「もう夢も希望もないよ！ 自分の現実だけが露らになるテスト期間。目の前は漆黒の闇、闇、闇。カレーだけが唯一の救いだったのに！」

「あつ、待って〜」

「シチューの馬鹿馬鹿〜〜〜〜っ！」

かごめは自室へと戻ってきてしまった。

もう、こうなったら不貞寝だよ！

勉強なんてしてらんないよ！

ぐうぐう……

布団に潜って数分後。

ぐう〜〜〜〜

「今は熟睡ではなく空腹の音だよ！」

はっ。私、誰に弁解してるんだろう。

携帯で時間を確認するとさっきのやり取りから二時間が経っていた。

あゝ、お腹空いた、吹田市。はっ。今は吹田市関係ない！

それにしても……なんで私意地張っちゃったんだろう。

すっかりカレー熱が冷めたかごめであった。

今からでも食べに行こうかな、と後悔し始めてふと勉強机を見ると、ご飯にかけたシチューが置いてあった。

急いで机に駆け寄ると、置手紙がある事に気づいた。

『お姉ちゃんが寝ているようなので、ここにシチュー置いておきます。試験勉強頑張つて。追伸、明日はカレー（甘口）にするね』

「瑠璃……」

かごめの心へ一気に良心の呵責が訪れた。胸が熱くなって感情が高ぶってきた。

「……いつもわがまま言つて、ごめんなさい」

それにしてもなぜあんなにカレーにこだわったのだろう。よくわからない。

まるでアイドルに夢中になったけど、熱愛発覚で一気に冷めたフアンのようなだ。

……アイドルのファンになったことないけど。

これもすべて期末テストが悪いんだ。

期末テスト撲滅！

ストップ・ザ・期末テスト！

涙がこぼれそうな目をこすりながら、シチューに口をつける。

すっかり冷めていたが、妹が自分のために一生懸命に作ってくれた姿を思い出すと、気にならなかった。

いつも料理下手な自分に代わって料理を作ってくれる妹に感謝した。

自分だって試験勉強があるのに……

「カレーよりシチューがいいや。シチューは甘口だけだし」

でも今度からはシチューとご飯は分けてもらおうと思うかごめだった。

「あ、そうだ……」

明日、瑠璃に謝ろう。

でも、明日はカレー曜日だね

第四席「気づいてくれた」ア 「コガレ

飯野加奈いいのかなは亜古河鈴町に住む高校生である。

彼女は二年三組の教室へ入り、自分の席に着き荷物を置くと、友人の古賀かごめへ話しかける。

「かごめ〜」

飯野加奈は古賀かごめと中学からの付き合いである。

「うっっ」

かごめは加奈の呼びかけに反応しなかった。

一心不乱に教科書へ目を通していているからだ。

「駄目。今、教科書を目に焼き付けている最中だから」

「最後のあがきか……」

現在、加奈の高校では期末試験が始まり、一時限目の「日本史」に向けて絶賛付け焼刃中だった。

「シチュー食べて、満腹感でまた寝なきゃ良かったよ……」

「そりゃアンタが悪いんでしょうよ！」

飯野加奈はツツコミの人だった。ついつい、かごめに対しては合いの手を入れてしまう。

ちなみに彼女はそこそこ真面目に勉強しているので、あまり慌てていない。

試験よりも加奈はかごめに気づいて欲しいことがあったのだ。

「……まあいいか」

勉強の邪魔をすると悪いと思い、渋谷席に戻る加奈だった。

こうして一時限目が終わり、二時限目は「英語（G）」である。休み時間中もかごめは依然として教科書とにらめっこであった。

「なんで、一、二時限目の間が十分しかないの？ うっ、覚えられないよ〜」

「ねえねえそれよりも……」

話しかけようとした加奈に向かつて、かごめは手で制した。

「私語は駄目、ゼツタイ。瑠璃のためにも私は頑張らないと！」

「なんで瑠璃ちゃんが？ つーか、昨日寝たお前が悪いだろ！」

加奈は丸めた教科書でかごめの頭を軽く叩いた。

「痛っ」と声をあげ、かごめは頭を抱えた。

「いや、そこまで強く叩いてないし」

「うわっつ、知識が漏れる！ 漏れる！」

「ちゃんと勉強していれば、知識は定着する！」

「だって、覚えることが多すぎるんだもん」

しおれた野菜のようにうな垂れるかごめを見て、加奈は片目を瞑り腕組みをして、ため息をつく。

飯野加奈は自宅では三人姉弟の長女として過ごしている。

そのせいか、かごめのような子を見ると少し放って置けなくなる。

「はあ……しょうがないなあ。私がポイントを伝授してあげるから」

「ホント？ 加奈様、ありがとう！ これから加奈ちゃん改め、カ

ナリヤ常勝軍団と呼ばせて！」

「私はブラジル人じゃない！」

かごめは一瞬で目を輝かせ、ツッコむ加奈の手を取った。

何度も握手をしながら、「これで試験は楽勝〜」とか言い始めた。

「とはいえ、楽勝とは思えないんだけど」

自分の教えたポイント一生懸命に覚えようとするかごめを見て、少し自分が誇らしくなる。

加奈は眼鏡の中心を指でつまみ、ゆっくり元の位置に戻す。

飯野加奈は眼鏡をかけている。家にも十種類以上の眼鏡が置いてある。

結構、眼鏡には気を使っていた。

実は今日、新しい眼鏡をかけた。

だけど、誰も気がつかない。

まあ、しかたないか。試験中に新調したのが間違いだもんね。
と自分を言い聞かせるものの、やはりかごめには気づいて欲しかったのだ。

かごめと元々知り合ったのも、眼鏡を変えた時、物珍しそうに話しかけられたことがキツカケだったからだ。

期末試験二日目もなんとか終了し、教室中が帰り支度をする。

加奈がかごめに目をやると、彼女は「カ・レ・ー！」とか言いながらカバンへ筆記用具を入れていた。

ああ、この調子じゃあ試験中は気づいてもらえそうにないなと軽くため息をついた。

「あれ？ 飯野、眼鏡変えた？」

「え？」

突然の呼びかけに驚くと同時に胸が躍った。

この声はもしかして……

加奈が振り向くと阪野将が、眼鏡を指差しながら微笑んでいた。

やっぱり阪野くんが気づいてくれた！？

「う、うん……」

「前のも良かったけど、今回の試験モードって感じがしていいじゃん」

「あ、ありがとう！」

飯野加奈は阪野将が気になっている。

最初は、かもめの幼馴染だと思っていただけなのだが、自分の細かい変化に気づいてくれることが数回あって以来、いつのまにか彼の姿を追うようになっていた。

自分が言われたいと願っていた事を気になる人が言ってくれた！

ああ、なんか顔が熱くなってきた。赤くなっているの阪野くんに見られてないかな。

頭の中、心音でドキドキなっているようで、少し唇が震えた。

「あゝ、阪野が加奈に言い寄ってる！」

かごめがニヤニヤしながらこっちへ近づいてくる。

わわわ、来ないで。私の幸せタイムが〜

「ち、ちげーよ！ 眼鏡の造形美がスゲーんだよ！ 安売りとは違うんだよ！ エロいだけの人にはそれがわからないのです！」

「私、エロくないし。アンタだる変態は」

「うっ……きゅ、求道者と呼んでくれ」

ちなみに阪野将は眼鏡フェチである。

ポリシーとして「眼鏡を取ったら美人という場面が好きと言う」

エセ眼鏡好きを認めない。眼鏡取ったら意味ないだろと思っている。飯野加奈を知ったのは、かごめから眼鏡の話聞いたからであった。

実に飯野加奈は眼鏡の事を好きであるか、阪野将には理解できた。曇り一つないレンズ。レンズ拭くにもフレームやレンズに負担をかけまいとする姿。

「お主、やるな」の心境であった。

かごめにからかわれて阪野は慌てて彼女に弁解する。

二人のやり取りを眺めながら加奈は少し寂しい気持ちになった。

だけど、疎外感を感じてばかりではいられない。

加奈は教科書を取り出して丸めた。

「坂野君が嫌がつてるでしょ！」

「痛っ！！ 知識が零れる、零れる〜」

「自業自得でしょ！」

飯野加奈はやはりツツコミの人である。

第五席「テストの中休みでキャッキャ」ア コガレ

土日の過ごし方は人それぞれである。

しかし、ほとんどの人に当てはまる事柄がある。

それは「金曜日の夜はやたら楽しい」である。

「やったー、乗り切った〜！」

「まだテストは来週も一日残ってるだろう」

「ちっ、ちっ、ちっ。土日があるのだよ、土日が」

ここは亜古河鈴高校。

金曜日の期末テストを終え、かごめは開放感に浸っていた。

それを諫めるのは飯野加奈であった。

「ああ、この金曜日の午後に感じる土日の全能感たるや、神の領域ですよ！そして魔物ですよ！」

「神が悪魔かハッキリしてくれ」

確かに金曜日の午後、あれほど土日に色々とやろうとする事を夢想するものの、日曜日の夜になると敗北感に似た気持ちになるものである。

とはいえ今は金曜日。かごめの表情は晴れやかである。

「まずは〜、土曜日は寝て過ごして〜」

「待てーい！」

「は？」

やはりここはツツコミを入れなければいけない。

ある意味義務感に駆られる加奈であった。

「土曜日は寝て過ごすだと？」

「え？ いけなかった？ じゃあ、寝休日つーことで。寝正月みた

いで』うつかり過ごした感』でてるでしょ？」

「言い方の問題じゃねえ！ はあ……」

加奈が頭に手を当て、呆れているところへ、人影が近づいた。

「あゝ、かごめちゃん発見」

「彩香ちゃんとまどかちゃん」

かごめの背後から彩香が抱きつく。やや離れてまどかが立っていた。

彩香とまどかは隣のクラスで、HRが終わり、かごめと加奈を迎えに来たのだ。

「丁度いいところに来たな。こいつに一言言ってやってくれ。テスト期間にもかかわらず、土曜日を寝て過ごすとか言いやがるんだ」

「だって、日曜日の朝のスーパーヒーロータイム見なきゃいけないから寝貯めしておかないと……」

「TVに夢中って。子供かよ！」

「日曜日の朝は結構、スケジュール詰まってるんだもん。七時半〜九時までスーパーヒーロータイムでしょ。その後、タイトルに『改』という名を付けただけで新番組扱いされる再放送アニメを見なくちゃいけないし。あと、『いいとも』も見ないといけないし」

加奈はコブシを震わせながら、かごめを睨みつける。

かごめは加奈が放つ怒りのオーラに気圧された。

後ずさりを始めるとすぐ後ろにいた彩香とぶつかった。

「かごめちゃん」

「彩香ちゃん？」

「あのね、アッコにおまかせが抜けてるよ」

「あつ、そうか！」

「TVから離れる！ 彩香、お前は成績優秀だから良いかも知れないけど、コイツは馬鹿なんだよ！ 先生お墨付きの馬鹿なんだよ。勉強しなきゃ駄目なんだよ」

「ひどいよ！ そこまで本当の事を言わなくても」

涙目になって、加奈を見つめるかごめの頭を彩香はそつと撫でた。撫でた途端、かごめは目じりを下げ、肩の力が抜けていった。

「そっか。かごめちゃんの事を考えると、ここはビシツと言ったほうがいいのかも」

「彩香ちゃんまで……」

かごめは彩香へと振り向き、神にお祈りするかのようには手を組んだ。

彩香は大げさに咳払いをした。

「では、こほん。かごめちゃん」

「は、はい……」

「私は……」

ゴクリとツバを飲み込む音が聞こえそうなくらい、かごめは緊張した。

ゆつくりと両手を振り上げる彩香。

審判は下された。

「かごめちゃんを支持します！ 寝休日ばんざーい」

「わーい、やったあー！ Yes、We Can！ Yes、We

Can！」

かごめは人差し指を高々と上げ、宣言した。

かごめの人差し指へ彩香とまどかの人差し指もあわさっていった。

「うわ、入りたくねえ」

微妙に古いギャグに戸惑う加奈だった。しかもよく聞くと……

「Yes、We Can't！ Yes、We Can't！」

「否定してる……」

馬鹿騒ぎが一段落したところで、加奈は流れをぶった切った。

「よし、土曜日は午後から勉強会だな」

「え、何で土曜日なんか勉強しなきゃいけないの？」

「全然反省してないな」

加奈は昨日と今日、試験前に散々レクチャーさせられた事を思い

出して身震いした。

あの二の舞にはなるまい。

「期末テスト、失敗しても知らんぞ」

「大丈夫、加奈ちゃん。失敗は振り向かないものさ」

「振り向け、お前は振り向け」

すると、かごめは眉間にしわを寄せ、口を一字にして加奈に近づいた。

「加奈、若さってなんだと思う？」

「なんだよそれ」

かごめの肩越しから彩香が顔をひっこりと出す。

「それはね、振り向かないことよ」

「はあ？」

首をかしげている加奈の背後で呟きが聞こえた。

「ギャバン……」

「おわつ、まどかがしゃべった！」

まどかがしゃべったことで、宇宙刑事のことはすっとんでしまった。

かごめは強い味方を得たかのように、腰に手を当てた。

「それにサッカー選手だって『振り向くなよ』って歌ってるじゃん！」

「あくもう、うるさい！とにかく勉強会だ。かごめの家に13時に集合な」

加奈の言葉にかごめは口を歪ませ「げげっ」と口から漏らすと、うつむいた。

だが、数秒して思いついたように顔を勢い良く上げた。

「あっ！ 瑠璃がね。集中して勉強したいから加奈ちゃんを呼ぶなっつて」

「見え透いた嘘つくんじゃない！」

「は、はい……」

やっぱり、怒るとおっかないな。さすがカナリア常勝軍団、と思
うかごめであった。

しおれているかごめを見て、どうしても冷徹になれない加奈はた
め息混じりに代案を示した。

「まつ、今日ぐらいは休みにして帰りにどこか寄ろうか」

「さすが、加奈ちゃん！ じゃあね或奇目死アルキメテスに行こう！」

「よし、行くか」

「うん！」

ちなみに或奇目死とは……説明はまたの機会に。

かごめ達が去っていくのをぼんやり見つめる影が一つ。物思いに
浸っていた。

ああいう女子がキャッキヤしているのって良いよなあ。

別に仲に入りたいわけじゃなくて、遠くから見ていたけなんだけ
ど。

「何やってんだ阪野行くぞ！ 今日テストの中休み企画、『ドキ
ッ、男だらけの大勉強会』するんだろ」

「お、おう……」

なんだろ、この敗北感に包まれる感覚は……

とか言いつつ、友達と何しようかと胸が高鳴っている阪野将であ
った。

土日の過ごし方は人それぞれである。

しかし、休日前のワクワクは皆同じである。

第六席「またお姉ちゃんが、ろくでもないことを考えてる（前編）」ア「カ

ここは古賀かごめの家。

すでに時間は十一時を過ぎていた。

土曜日に勉強会をすると約束したにも関わらず、かごめは規則正しい寝息を立てていた

「お姉ちゃん早く起きないと、皆が来ちゃうよ」

ドア越しに瑠璃が起こしにきたが、まったく起きる様子が出なかった。

仕方なく部屋に入り、ベッドで寝ているかごめの体を揺する。すると、「うん」という声と共に、かごめは布団から顔を覗かせる。

「え、また大丈夫だよ……」

「これじゃあ前回と同じ展開だよ。加奈さんにまた怒られるよ」

「う、うん……」

面倒くさそうに瑠璃を一目見ると再びかごめは布団へ潜った。

「あつ、二度寝した」

しかし、数秒後にかごめの身体がビクツと揺れた。

「はっ！ 今、夢の中に大きな眼鏡が出てきた」

「はい、じゃあ起きようね。お姉ちゃん」

「うん……」

服を着替え、支度をしたかごめはキッチンへと向かう。

すでに時間は十二時半になっていた。

「うっ、すでに昼ごはんか……うわ、損した！ 新喜劇見逃した」
かごめは口を大きく開けて天を仰ぐ。

瑠璃はこの光景を毎週見ている。普通なら呆れてしまうところだが、瑠璃にとってはこの顔を見ると休日なんだなという気がして微

笑ましかった。

「お姉ちゃん。そういうと思って目玉焼き作ったよ。これで朝ごはん気分になったら?」

「おおっ、さすがは瑠璃! 我が心の妹よ!」

「お、お姉ちゃん、私は本当の妹だよ。はい、しょうゆ」

「いい。今日は塩気分だから」

「どうして? いつも目玉焼きに塩やソースやマヨネーズをかける奴は死ねっていつてるじゃない」

目玉焼きへかけるものは人それぞれだ。しかし、妙に否定したくなるのも事実である。

「昨日テレビで素材の味が生きるのは塩だって言ってた」

「それは天ぷらの場合でしょ」

「だからだよ。天ぷらじゃなくて目玉焼きに塩かけたら、なんか革命起きるかもしれないじゃん」

「そう……。か、革命起きたら教えてね。はい塩」

「えー、突っ込まないの? カナリア常勝軍団だったらきつとツツコんだよ」

かごめは背後に身震いするような気配を感じた。
つ、ツツコミオーラが迫っている。

「だから、私はブラジル人じゃないっつーの」

「うわっ! 加奈カナ!」

「一回一回名前を変えるなっ!」

自分のツツコミ探查能力も上がってきてるなあ。と感心するかごめだった。

一方、加奈は腰に手をあていたずらを叱る母親のような体勢になっている。

「まったく、呼び鈴鳴らしても玄関から呼んでも誰も来ないから心配してきてみれば……」

「あらあら、かごめちゃん。お食事中?」

彩香が加奈の後ろから顔をだした。

まどかは加奈の隣で『私はケチャップ派』とフキダシの付いた可愛い猫を描いたノートを掲げている。

「さっさとご飯食べて。すぐに勉強するぞ」

「え〜」

明らかに嫌そうな顔をしたかごめに加奈がまどかの持っていたノートを丸めて頭を軽く叩いた。

数十分後。

かごめは昼食を済まると、自分の部屋に集まっている皆の元へ急いだ。

部屋のドアを開けると、すでに他の三人がテーブルで勉強を始めていた。

かごめはテーブルに向かうわけではなく、テレビへ向かう。

「ねえねえ、なにをする？ デッドライジングやる！ さあ、今日こそゾンビどもを根絶やしに……」

「か〜ご〜め〜」

「あわわ、勉強メガネゾンビ！」

「誰がだっ！ そのXBOX360をしまえ！」

「ちょっとぐらい良いじゃん！」

「アンタは何も勉強しとらんだろっが！」

加奈が呆れてため息をついた時、部屋のドアがノックされる。

ドアが開かれ、顔を出したのは瑠璃だった。

「皆さん。ちょっといいですか？ 飲み物ってコーヒーでもいいです？」

「ああ、瑠璃ちゃん、ありがとう。この遊び人と違ってしっかりしてるねえ」

「私だってシツカリしてるよー！」

加奈はジト目でかごめを見つめる。

かごめはそつぽを向き、口笛を鳴らしながら、後ずさりした。

「ほう、すっかりしてるだと？ 時間になってもまだ昼食を食べているような人間が？」

「い、言わせておけば……そのとおりだけど」

加奈はメガネを指でつまんで元の位置に戻すと、薄笑いを浮かべる。

「それでもお姉さんなのか？ 妹に飲み物作らせるつもりか？」

「うっ……わ、わかったよ。やればいいんでしょ、やれば！ 加奈ちゃんのバカ！」

かごめは「うわーん」とか言いながら部屋を出て行った。

「はあ。アイツはすぐ『うわーん』とか言っつて逃げる」

「加奈ちゃん。でも、ちよつと言い方がきつくない？」

「いいんだよ。普段からアイツは彩香、お前に甘やかされすぎてるんだから」

「ぐすつ。可愛そうなかごめちゃん……でも、悲しそうな顔も興奮するね」

「うわっ、あぶねえ奴」

まどかはノートにリアルなゾンビの絵をせっせと描いていた。

キッチンでかごめはカップやお菓子の用意を始めた。

しかし、普段炊事をまったくしないかごめの用意はなかなか進まなかった。

「定年後のお父さんの心境だよ。もしくは彼女が家を出て行った後の彼氏」

「私をそれを見て心配する妻の心境だよ。はい。コーヒークップ」

「さすが、瑠璃。我が家のキッチンキーパー！ KKR！」

「キッチンキーパー瑠璃ってこと？ ……お姉ちゃん。早く準備しな」

確かに今はKKRのことを考えている場合ではない。

かごめはインスタントコーヒーの粉を入れ、お湯をそそいだ。

カップが黒々とした液体に満たされると、かごめの頭になにかが閃いた。

「はっ。いいこと思いついた！」

「びつくりした！ とうしたのお姉ちゃん」

かごめは腕組みをして、肩を揺らしながら高笑いをした。

「下克上じゃ！ あはははっ」

「お姉ちゃん、加奈さんより身分が下なんだね」

「学力的ヒエラルキーでは下なのだ」

「勉強しようね。お姉ちゃん」

一瞬二人に沈黙がおとずれ、かごめは肩を落とした。

「うん……でもその前に、くっくっくっ。カナリア常勝軍団の常勝

もここまでだよ！」

「そ、そう……」

再び元気を取り戻したかごめ。

隣にいた瑠璃は「またお姉ちゃんが、ろくでもないことを考えて

る」と思うのだった。

第七席「またお姉ちゃんが、ろくでもないことを考えてる（後編）」ア「カ」

ここは古賀家のキッチン。

かごめによる一大復讐劇が行なわれようとしていた。

「ねー、ねー、瑠璃。さっきのしょうゆは？」

「え？ そんなものどうするの？」

「いいからいいか」

朝、今日は目玉焼きにはしょうゆの気分ではないと言っていたのになぜ？

瑠璃の頭には「？」が渦巻いていた。

かごめは瑠璃からしょうゆさしを受け取るとコーヒーカップの一つに向けて傾けた。

「こつするの！」

「ああつ、それは！」

見事にしょうゆはコーヒーカップの中に混ざっていく。

「しょうゆ地獄で加奈ちゃんに天罰を！」

「お姉ちゃん、これは……」

口に手をあて驚く瑠璃にかごめは勝利の笑みを浮かべた。

「瑠璃、しょうゆ混入は内緒だからね」

「でも、それは……」

「いいから、いいから。にしてもさすがは瑠璃。目玉焼きを昼食にだしてくれたお陰で最高の作戦を思いつけたよ」

「え？ そうだね……」

瑠璃は口を半開きにして、あいまいな笑みを浮かべた。

一方のかごめは、口元に手をあてて「おーほっほっほっ」と高笑い。

さっそくおぼんにコーヒーカップを載せてみんなの元へ向かうことにした。

「まあ、たまにはいいか」
かごめの後姿を見つめ、瑠璃は小さく舌を出した。

足取り軽く、かごめは自室に戻った。

ドアを開けると皆はゲームなどはしないで、勉強していた。

「ちえつ、つまんない」と口を少し尖らせて、テーブルへ向かう。
加奈がいち早くかごめに気づき、声をかける。

「結構、時間かかったな」

「えへへ、ちよつとね。彼女がいないとキッチンを把握できないのさ」

我慢、今は我慢だ。しょうゆコーヒーは加奈ちゃんの嫌味を耐えた末に訪れる栄光のスパイスさ！

テーブルにおぼんを置くと、かごめはコーヒーカップを見つめてニヤニヤした。

「なんだよ」

「な、なんでも。はい、加奈ちゃんの分がこれ」

手早くコーヒーカップが加奈の前に置かれる。

加奈はかごめとコーヒーカップを交互にみつめた。

「うーん……」

加奈の直感がなんらかの危険を訴える。

他の二人にコーヒーカップを置くかごめを加奈は手で制した。

「ちよつと待った」

「な、なに？」

「今さつき、加奈ちゃんの分」が「これ、って言ったよな。』が
つてなんだ？」

「ええつと……なんのことかな？」

かごめは視線を逸らし、口笛を吹いている。

加奈はかごめの表情を逃さなかった。

「かごめ、淀川長治ばりに眉毛が上下している。嘘ついている時の仕草なんだよ！」

「げげっ!!！」

「加奈ちゃん、もっとわかりやすいサインあるよ。それに淀川長治って誰？」

まどかはゾンビの絵に『さよなら、さよなら、さよなら』とフキダシを付け加えていた。

かごめは口をわなわなと震わせて、おぼんを抱きしめるようにして身を守った。

しかし、加奈はツッコむことなく、静かに一言いった。

「混ぜろ」

「え？」

「コーヒーカップ、ロシアンルーレットだ」

「ええーっ!!」

「面白そうね」

幸いというか、コーヒーカップは皆、同じ色・サイズだった。

勝ち誇った表情を浮かべる加奈。

眉を八の字にさせて、不満の声を上げるかごめ。

目を輝かせて手を合わせる彩香。

「加奈ちゃん、どうして？いつものなら真面目にやれって言うのに」

「だって面白いだろ？リスクは皆で被るっていうことで。ゲームがしたかったんだよな、かごめ」

「うぐ……」

まさか加奈がコーヒーしようゆに乗ってくるとは思わなかった。

ツッコミがボケに乗るなんて……腕を上げたな、加奈ちゃん。

とか言っている場合ではないことにかごめは気づいた。

クジ運の悪さはこの中で随一のかごめにとっては圧倒的不利な条

件だった。

かごめにとって、唯一なにも意見を表明していないまどかが最後の砦だった。

「まどかちゃん、この二人になんとか……」

まどかはノートをかごめに見せる。

親指を立ててるゾンビの絵が描かれてあった。

「楽しみ〜」とかフキダシが付いていた。

「いつもまどかがかごめの味方だと思うなよ」

「あう〜」

かごめは観念するしかなかった。

コーヒーカップはかごめ以外の人たちによって混ぜられた。

それぞれの前には湯気を立てているコーヒーカップ。

よし、この熱さなら、別の液体が混ざっているはずがない。

コーヒーカップを触って勝利を確信する加奈。

「あ〜、コーヒーの香りだ〜」

暢気だが香りのチエツクは欠かさない彩香。

「さわ……さわ……さわ」とフキダシを付け加えているまどか。

ふえ〜ん、神様ごめんなさい！ これからは良いことしますからお助けを〜

神頼みするかごめ。

「よし、せーので飲むぞ」

加奈の声に皆が頷く。

「いくぞ。せーの！」

掛け声と共に皆がコーヒーカップに口をつける。

ゴクゴクと静かな室内に小さな音が響く。

やがて、それぞれがコーヒーカップをテーブルに置いた。

「あれ？ 普通のコーヒーだ」

「私もです」

まどかはゾンビの絵に『普通』っていうフキダシを付け足した。

残るかごめは口元を引きつらせて、コーヒーカップを置いた。

「じゃあ、私だ！」

加奈は素早くかごめのコーヒーカップを覗く。

カップ内のコーヒーの量が全然減っていなかった。

「つか、飲んでねえだろ！ 皆同時って言っただろ！」

「えー、だって」

「お前、マラソンで『一緒に走る』とか言っておいてブッチギるタイプだな」

「大丈夫だよ、私マラソン大っ嫌いだから」

「そういう問題じゃねえ！ さあ、飲んでもらおうか」

「あわわわ……」

涙目になって震えるかごめ。

他の二人を見渡す。

「さあどうぞ」

まどかはゾンビの絵に『さあ』っていうフキダシを付け足した。

かごめの脳裏に「さよなら、さよなら、さよなら、さよなら」とお別れをする淀川長治が浮かんだ。

ええいつ、ままよ！

かごめは一気にコーヒーカップへ口を近づける。

皆の視線が集まった。

液体がどんどん自分の口に近づいてくる。

「くっ……」

「くっ……」

「くっ……」

「やっぱり無理！」

かごめが顔をのけぞらせた瞬間、加奈のメガネが光る。

「よし、無理やり飲ませろ」

「了解」

すでにまどかはゾンビの絵に『処刑開始』っていうフキダシを付け足していた。

「あぶぶぶぶ〜」と奇声をあげるが、無理やりしょうゆコーヒーが口内へと侵入していく。

「自業自得だ〜あはははっ!」

大笑いする加奈だったが、かごめのリアクションがイマイチ薄いことに気づいた。

飲んだ当人も不思議そうな顔をしてコーヒークップを見つめている。

「あれ?」

「どうした、かごめ?」

「普通だ」

「なんだと……?」

「でも、ブラックでにが〜い!」

試しに他の三人もそれぞれのコーヒーを飲んでみたが、どれも普通のコーヒーだった。一斉に室内に響く疑問の声。

「〜〜あれ〜〜〜?」「〜」

一方、キッチンでは瑠璃が昼食の食器を洗っていた。

まさか、姉に朝起きてもらうため、仕掛けたいたずらがこんなところで発揮されるとは思わなかったと、驚く瑠璃。

でも、良いか。真相は闇の中ってね。

やはり瑠璃もかごめの妹だということだろうか。

瑠璃は皆の『あれ〜?』という声が聞こえると少しだけ舌を出した。

第七席「またお姉ちゃんが、ろくでもないことを考えてる（後編）」ア コガレ
活動報告（12/5分）に「今週のア コガレ—ロメモ」を載せま
した。

簡単な一席解説です。

よろしければ、お読みください。

第八席「トイレ中も一緒にいたいから」ア コガレ

「今日から立つてしなさい！」

さかのひろみ 阪野裕美は吉見和哉の前で仁王立ちしている。

和哉は一瞬にして胡坐から正座に変えた。

彼は自分の行動を半年ほど遡り、怪しい点をチェックした。

な、なんだ？ この前の合コンがバレたか？ いやいや、口止めは完璧なはずだ。

下手に口出しをすればボロが出る。沈黙は金なり……

つて、今さつき『今日から立つてしなさい』とか言わなかったか？

裕美に向かい、和哉は恐る恐る質問する。

「え？ なにを？」

「トイレに決まってるでしょ！」

決まってると言われてもわかるわけないだろ。

と心の中で毒づいたが、笑顔で対応した。

阪野裕美と吉見和哉は同棲してから一年半が経過している二人。

亜古賀鈴町にあるアパートの二階に住んでいる。

立ちションしろなどという彼女は初めて見た。

和哉の頭は疑問符で一杯だった。

「なんで？ 座ってしないとトイレ掃除が大変だよ」

「誰に教わった……」

「へ？」

裕美は和哉の襟首をつかんでねじ上げた。

「ろくに掃除もしないくせになぜ大変だと知ってる？」

「ええっ！？ なんなこと、ちよつと想像したらわかるだろ」

「だったら、なんで今までしなかったの？」

実は和哉は掃除していた。

しかし、自分が掃除していることを知ったら彼女の立場がなくなる事を知っているので黙っていたのだ。

「そんなことより、今は立ちシヨンの話でしょ？」

「むっ……そうだった」

「……とにかく。私が良いって言うまで、立ちシヨン決定ね」

「女の子が『立ちシヨン』って、はしたないよ」

「うるさい。ちなみに掃除はアンタがやること」

「なにそれ？ 自分でわざわざ汚して、自分で掃除？ なにそれ？ 誰得？」

「私が得します」

「あっ、ああなるほど……。って、納得できるか！」

さすがに我慢ができなくなり正座から立ち上がろうとするが、裕美に頭を押さえつけられ、立ち上がることができない。

くっ、乗りツッコミも成立しないのか……それにしても、いつからこんなに立場が逆転したのだろう。

多分、バレンタインデーからかもしれない。

和哉は今年のバレンタインデーに浮気が発覚し、裕美に毒入りコーヒーを飲まされた事を思い出した。

しかも、裕美は浮気相手と友達になり、今でも交流している。

恋敵まで味方につける度胸と、結局自分を許してくれた心の広さを考えると、敵わないなあと思う。

和哉は上目づかいで彼女を見つめる。

もしかすると自分は裕美に母親のような包容力と厳しさを求めているのかもしれない。

叱らりたい願望。

きつとそう言ったら彼女は激怒するに違いない。

『私はお前の母親じゃない』と。

和哉がそんなことをつらつらと考えていると、裕美は彼の頭を軽

く叩きながら告げた。

「今日からしばらくはトイレの時は私を呼ぶこと」

「なんで？」

「立ちションするかどうかを見張るためでしょうか！」

「ええ〜っ！！ 出なくなるから、男はデリケートなんだよ！」

「知るか」

「ええーっ!？」

『トイレ中も一緒にいたいから』とかいう理由でトイレのドアを開けている同棲カップルの話はテレビで見たことがある。

だが、立っしてしているかどうかを監視するためにドアを開けるなんて話は聞いたことがない。

和哉は行き過ぎた行動に困惑した。トイレができない子供を見守る親か！

「理由だけ教えてくれよ」

「アンタを肉食男子にするためよ」

もう浮気ばれてる時点で草食じゃないだろと言いかけて止めた。

また毒入りコーヒーを飲まされたらたまったもんじゃない。

「とにかく、今から開始だからね。はい、よーいスタート！」

裕美は話を一方的に終わらせるとテレビをつけて番組を見始めた。わけがわからず正座したままの和哉。

するとズボンのポケットに入れた和哉の携帯が震えた。

一方、裕美はテレビを見つつも、まったく頭に入っていない。

くそっ、あれさえないければ……

裕美が考えていたのは昨日の出来事だった。

和哉の元浮気相手と待ち合わせをし、喫茶店で話することになった。

彼女もすでに別の彼を見つけ、一緒に暮らしているらしく、自然と同棲中の愚痴が話題の中心になっていた。

「はあ、やっと彼が座ってしてくれるようになったわ」
「なにが？」

「トイレのこと」

元浮気相手は視線を窓へと向け、ため息混じりに答えた。

「『座ってしたら、男じゃなくなる』とか言つてさ。躑けるのに苦
勞したわよ」

「躑つて、子供じゃあるまいし」

「いいや、アレは子供だね。トイレの掃除がどれだけ面倒くさいか、
わかれっーの」

愚痴を聞いているものの、裕美は少し優越感に浸っていた。

和哉はちゃんと座ってくれているので、掃除に困ったことがなか
ったからだ。

「えゝ、ウチの相方は、最初っから座つてしてたけど？」

しかし、反応は裕美が思っていた方向とは違っていた。

「あゝ、それつてさ……」

元浮気相手は早紀へと視線を戻し、口元を歪ませた。

「調教済みだわ」

「え？」

「前の彼女に調教され済みだわ」

「なっ……」

「残念だけど、元カノの勝ちだわ」

「なななななななゝゝゝにゝゝゝ!!」

という出来事が裕美の頭を駆け巡っていた。

くそっ、嫌だ。やきもち焼いてるなんて思われたくない。

これじゃあまるで私が負けを認めたいじゃない！

あー、考えるだけで疲れてくる。

それにしても恋愛って勝ち負けなんだろうか。

「裕美」

「なに？」

「トイレ行くけどいいの？」

裕美が振り向くと、和哉は立ち上がるうと中腰になっていた。なんでコイツ、私のいうことに従ってくれるんだろ。

裕美は自然にため息が出た。もちろん自分に対してである。もう、賤をどっちが先とか後とかかどうでもいいじゃん。あんな無理難題ぶっかけても話を聞いてくれるんだから。そこがちよっと頼りないかもだけど……

「もういい」

「え？」

再び裕美はそっぽを向く。

和哉は立ち上がって、わざとらしく残念そうに独り言をいう。

「あんな姿見せるの、裕美だけなのに。もったいない」

裕美はテレビに向いたまま即答する。

「変態」

「やきもち焼きよりはましだろ？」

「え！？」

裕美が慌てて和哉へ振り向くと、彼は自分の携帯を振っている。

すばやく携帯をひったくり確認すると、昨日会った元浮気相手からのフォロワーメールが書かれてあった。

『男なら彼女の無理難題を受け止めなさい』と。

和哉は携帯を印籠のように振りかざし、裕美に笑いかけた。

「よかつた」

「なにが？」

「裕美がやきもち焼いてくれて」

「なっ！」

裕美は自分の顔が一気に赤くなるのを感じた。

胸の奥から湧き上がる「恥ずかしいっ！」という気持ちに押しつぶされそうになった。

今すぐ布団に包まりたいっ！

誰もいないところへ行つて大声を上げたい！

テール越しに和也が裕美を覗き込む。

「な、なによ」

「いや別に」

「ニヤニヤするなっ！ こっち見るなっ！」

裕美はその辺にあるものを手当たり次第投げつけた。

好きな人と自分の間には上下や優劣はないと思いたいけど……

やっぱり悔しいっ！

コイツには負けたくねええええええっ！！

「じゃあ、監視の話はなしってことで」

「ちよつと待って。一回ぐらいは、監視する」

「ええーっ!?!」

ざまあみろっ！

裕美は和哉に向かって満面の笑みを浮かべた。

第九席「放課後で見ちゃった」ア コガレ

ここは亜古賀鈴高校。

試験も終わり、通常のリズムを取り戻した校舎。

その中で息を弾ませて走る女子高生が一人。

掃除も終わり、飯野加奈は足早に教室へと戻っていた。

なんと今日は阪野将と日直の当番だったのだ。

放課後に二人きりなんてこんなチャンス滅多にない。

教室の前まで来ると、加奈は立ち止まり弾む息を整えた。

こんな乱れた息を彼に見られたら恥ずかしい。

やがて上下する肩の動きが収まるとゆっくり教室へ近づく。

ここで阪野くんが私を待っていてくれるはず……まあ、日直だからなんだけど。

加奈はそっと教室のドアから室内を伺った。

すると教室の中に息を弾ませて動く男子高校生が一人。

阪野将は拳を胸元に構え、軽快なフットワークで左右に揺れる。

「阪野くんがボクシング？」

彼は待ち時間を持って余したのか、一人黙々とシャドーボクシングをしていた。

眉間にしわを寄せ鋭い眼光を放ち、口も真一文字に結ばれ、真剣な表情が伺えた。

『こんな阪野くんの真剣な顔……初めて見た』

いつも自分に話しかけてくれるときはあんなに優しい表情なのに。風が教室内に入り込むとカーテンが舞い、阪野が相手に見立てて拳を繰り出す。

手数が多い左ジャブで相手をけん制し、カーテンが押し戻される。

さらに風が吹き、大きくカーテンが広がると、姿勢を低くして頭を左右に振って近づいていった。

小さい回転で放たれるショートアッパーは、おそらく人間が相手ならボディーに突き刺さっていただろう。

十二月ともなれば、日が落ちるのも早い。教室内はすっかりオレンジ色に染まっていた。

加奈には西日に照らされる阪野が黄金色に光を放っているように見えた。

胸がドキドキしてる。さっき呼吸を整えたばかりなのに。

「カツコいいなあ……」

加奈は頭にまで血が上ったのか、意識があいまいだった。傍から見ればのぼせていると人はいうだろう。だが、自分ひとりだけがこの情景を独り占めしている。

それだけで幸せ一杯だった。このままずっと続けばいいのに。

と願ったものの、長くは続かなかった。加奈は見とれて教室の鍵を落としてしまったのだ。

静かな廊下に金属音が響く。

音に反応して阪野将は教室の外へすばやく振り返る。

加奈はとっさにドアの影に隠れた。

「……誰？」

「……誰？」

いつまでの隠れているわけにもいかない。どちらにせよ私は今日阪野さんと日直なのだから、いずれバレるだろう。

加奈は観念してドアの影から顔を出した。

「い、飯野か……」

もしかして隠れて見ちゃって怒ってるかなあ。

でも、今がチャンスかも。いつもはかごめに邪魔されてるから、こんな機会めつたにないよ。

加奈は胸に手を当て、勇気を振り絞って口を開いた。

「ごめんね。阪野くんがあまり真剣なんで声をかけそびれちゃったの」

「あ、そう……」

阪野が西目を背にしているせいか、表情を読み取ることができない。

このまま突っ込んだ話をしているのかな？

あゝっ、かごめ相手ならどんどん突っ込んでいけるのに！

「あの阪野くん」

「な、なに？」

「……ボクシングやってるの？」

「えっ……」

しばらくお互いが沈黙したまま時間が経過してしまう。

加奈は必死に次の言葉を探すけど、気のきいた言葉は浮かばなかった。

こんな時、自分がとてもコミュニケーション下手だと実感する。

加奈には永遠とも取れる時間が経過した後、阪野は頭を軽くかきながら「ま、まあ……」と答えた。

相変わらず表情は読み取れないが、別に怒ってもないらしいことがわかった。

すると加奈は矢継ぎ早に質問を始めた。

「ジムとか通ってるの？」

「ま、まあ……」

「プロ目指してるの？」

「まだまだだよ……」

「左から出るパンチすごいね」

「ああ……ジャブだよ。主に相手をけん制するために使っただ」

加奈は考えて話をしているわけではない。
おそらく明日は話をした内容を覚えていないだろう。
少しでも阪野と会話をしたいという思いだけで、話を繋ぐことに
精一杯なのだ。

「それにすぐく頭を振るんだね」

「ああ、これはダッキングっていうんだ」

「私もやってみて良い？　こうかな」

完全にやりすぎだった。加奈自身、制御が利かないのだった。

彼女はさつき見た阪野のマネをして、低い姿勢で頭を左右に振る。
すると、激しく頭を振ってしまったために、足元がふらついた。

「きゃっ」

「危ないっ！」

加奈は短い声をあげ、体勢を崩す。

慌てて阪野が手を伸ばした。

間一髪で加奈の身体は阪野の腕に包まれ、転倒を免れた。

「だ、大丈夫か飯野？」

「え……うん」

加奈が瞑った目をゆっくり開けると、目の前に阪野の顔が迫って
いた。

やだ。阪野くんが抱きとめてくれたんだ。

今まで遠くからしか見たことがなかった顔がこんなに近くにある。

まず唇が視界に入り、意識が吸い込まれそうになる。

い、息が届きそう。

などと考えながら視線を上げると、阪野の目と見つめあう形にな
ってしまった。

一気に現実感が襲い、頬に熱を伴う。身体が強張り視線も逸らす
ことができない。

やだ、やだやだやだやだ

！

「わわっ、ご、ごめん……」

阪野は加奈の反応に慌てて突き放すように離れた。

二人は再び黙ったまま動くことができない。

数分後、阪野に背を向け、自分を抱くような姿勢のまま、加奈はか細い声でお礼を言った。

「阪野くん……助けてくれてありがとう」

「お、おう」

その後は淡々と日直の仕事をこなし、日誌を書いて教室の戸締りを終えた。

今日は忘れられない日になったなあ……

と隣を歩く阪野を横目で眺めながら、加奈は日直日誌を胸にギョツと抱える。

「あのさ……飯野。頼みごとがあるんだけど」

「なに？」

「この事はかごめには内緒にしてくれないか？」

「えっ!？」

なんでかごめの話になるんだろう。

まさか坂野くんかごめの事が……幼馴染だもんね。なくはないか。

加奈は口元到人差し指を当てて、斜め上を見た。

「どうしよっかな」

「頼むっ、頼むよ!」

片目を瞑り、阪野を伺うと両手を合わせこちらを拜んでいた。

彼の姿がともいじらしく、何でも許せそうな気がした。

「いいよ」

「ホントか!？」

でも、ただでは終わらせたくない。

加奈は坂野の前を歩くと不意に振り返った。

「じゃあこれは二人の秘密ね」

阪野は家に帰ると自室に飛び込み、頭を抱え床に転がった。

「ああ~~~~~っ！！　なんで俺はあんなウソついてしまったんだ！」

昨日ボクシング漫画を読んだせいで、カーテン相手に戯れていただけとは言えない！

アレだよ！　電気の本ものつもりでシャドーボクシングしてみただけなんだよ！

くそっ、許すまじ「はじめの　歩」

ああ、これから俺は飯野とどうやって接すればいいんだよ！

しかも、かごめに知られたら……一生笑われる。

かごめに知られない事を願う阪野。

『左から出るパンチすごいね』

『ああ……ジャブだよ。主に相手をけん制するために使うんだ』

なに言ってるんだよ俺！！

思わずドヤ顔しちゃったよ~~~~！！

うはああ~~~~ W W W W W W ! !

飯野の記憶から、俺消えてえええええっ！！

女の子を抱きとめた事実よりも羞恥にまみれてもだえ苦しむ阪野だった。

うえ W W W W えええええっ！

第十席「基準は我にありっ!!」ア コガレ

亜古河鈴高校の職員室。

期末テストが終わった直後で、室内はテスト採点祭となっていた。

二年の英語（R）担当の高橋和実たかはしかずみもテストの採点に追われていた。最初は順調に進んでいたのだが、一人の生徒の採点を終えると頭を抱えて深いため息をついた。

「はあ〜微妙〜〜っ」

「どうしたの？ 和実」

声をかけたのは現国担当の浅尾早紀あそはさきだった。

高橋とは二十代後半で同世代の女性ということで、なにかと仲良くしている。

二人とも亜古河鈴高校の卒業生である。

「古賀かごめ。英語（R）が二十九点。あと一問正解だったら三十三点で追試免れたのに」

「残念ね、古賀さん。でも現国の成績は良かったはずだよ。確か八十九点」

高橋は二年三組の担任。三組から自分の教科で追試が出ることに、肩を落とした。

「もう少し頑張って欲しいんだけどね。現国は点数良いのに英語はさっぱりって」

「まあ、英語は苦手な子も多いから……」

浅尾のフォローに高橋は首を振った。

「違うよ。あの子の場合、なぜ現国の成績が良いのか聞いてみたの。そしたら『現国はほとんど暗記しないでテストできるから楽』って言ったんだよ」

「ええっ!?! うーん、考えてみれば確かに覚えなきゃいけない漢

字の書き取りなんかは点数が悪い。だけど本文読んで対応する問題は授業受けなくても点数稼げると……」

浅尾はそこまで解説して、古賀かごめは自分の授業と関係なく高得点をとっている事実を目の前が暗くなった。

「で、でも読解力はあるってことよね！ それは授業をちゃんと聞いているからだよ！」

「早紀、どうしたの？ 急に自分の授業のフォローを始めて」

「わわわ。ハッキリ言われた。考えたくなかったのに……」

もしかして本とか読んでいるんだろうか？

小説なんか読んでもる子はまれに勉強しなくても読解問題を解くことができるって聞いたことがある。

でも、古賀かごめが小説を読んでいるなんて想像できない。

と考え、高橋は首をかしげる。

「まあ、簡単に言えば古賀かごめは暗記したくない、勉強したくないってことですよ」

「暗記だけが勉強じゃないけどね」

古賀かごめが勉強する気になるにはどうしたらいいか、二人で話し合っていたところに一人の男性教師が近づく。

「ちよつと失礼」

「あら、岩瀬先生」

二人の前にあらわれたのは、日本史担当の岩瀬いわせ守護まもだった。彼も二年生を担当する三十代前半の教師である。

「高橋先生、お願いがあります」

「はい？ なんですしょう」

岩瀬は口元に拳を当て、大げさに咳払いをした。

「高橋先生、私に免じて古賀かごめのテストを一問正解にしていただけないでしょうか？」

「ええっ！？ できるわけないですよ」

なに言ってるんだこの人は。

前から変人と評判だったけど、皆の言う通りかも……

高橋の怪訝そうな顔を気にすることなく、岩瀬は力説する。

「あの子は追試を受けるような子じゃない。真面目な子なんです！」

「はあ……」

「この前も『街中にいる外国人に向かって中指立てたら本当に怒るのか？』という実験を真剣にですね……」

「いや、それはまずいでしょ人として！」

良い子はマネしちゃ駄目だからね！ と心で叫ぶ高橋、浅尾。

「でもね、古賀がごめは純粹なんですよ！」

「岩瀬先生……それは無知っていうんですよ」

「そこですよ！」

「はい？」

「教師が最初っから生徒を馬鹿にして下に見て。それが教育者の態度でしょうか！」

岩瀬の勢いに負け、高橋はただ口を歪めながら聞いている。

「確かに馬鹿だ。彼女は馬鹿だ。でも、愛すべき馬鹿なんですよ！」

だって実際、外国人に試そうとしたら、飯野加奈に殴られてましたよ」

「で、でしようね」

さすが飯野加奈、ツツコミ能力抜群だわ。と高橋は心の中でほめた。

「岩瀬先生の言うとおり、真面目で純粹だとしましょう。でも赤点なのは」

岩瀬をなんとかして諭そうとする高橋の言葉をさえぎるように彼は反論する。

「実際、私は彼女に加点しています」

「宣言しないでください！ 公平にしないと駄目ですよね？」

はつ。先輩にもかかわらず、普通にツッコんでしまった。

だが、岩瀬は一向に構うことなく加点について解説を始めた。

「まず、バカ加点。ボーナス問題で黒船来航のペリーを答えにしました。なのに『ペリー』を『ベリー』（おしやれ奥様必見雑誌）って書いてありました。『ペリー』を『ペルー』と間違えるならいざしらず、『ベリー』（おしやれ奥様必見雑誌）って……こんなアホな子のために二点あげます！」

岩瀬の話はとどまる事を知らない。

「続きまして、ボケ加点」

「まだあるんですか!？」

「答えがわからず、解答欄に『スクープ! 蜷川新衛門の子孫は元格闘家!』と書いてありました。この回答を見たとき私はツッコミ衝動に駆られましたので二点あげます。蜷川って漢字で書く労力を別のところに使えよ! ってね」

腰に手を当て、誇らしげな態度の岩瀬に高橋は言葉を発することができなかつた。

岩瀬先生、モノが違う。(倫理的に)

啞然としている高橋に浅尾が耳打ちする。

「そっとしておいてあげて」

「なんで、明らかに変でしょう」

「あれだけ加点をしても古賀かもめは日本史を余裕で赤点なの。どうにかして古賀かごめにやる気を出してもらいたいという先生の加点という計らい。それが今や裏目にでて、テスト用紙が大喜利化してるのよ」

「なるほど……」

一見誇らしげにしている岩瀬の表情も高橋には血の涙を流しているように見えた。

教育者として努力されているんですね。

「岩瀬先生……」

高橋は岩瀬に共感ともいえる感情が沸いた。共に戦いましょうと心に誓った。

しかし、岩瀬は空気をまったく読まずにしゃべり続けている。

「最後にもっとも重要な加点が一つ。それは……姉ちゃん加点。いつも頑張るお姉ちゃんに二点あげます。私、お姉ちゃん萌えなんです」

違った　っ！　この人やっぱり変態だ　っ！

高橋は心の大地へ大声でさげんだ。

しかし、それだけでは収まりきらず、岩瀬にツッコんでしまう。

「駄目でしょう！　もはやテスト関係ないじゃないですか！　いや、全部変ですが。特に最後のはアウトですよ！」

岩瀬は動じることなく、まるで金言を発表するかのようにはっきりと声をあげる。

「お姉ちゃんは正義なのです」

「まじめに勉強している生徒のことを考えてあげてください！」

「私は大真面目ですよ！」

「そこは世間の基準に合わせてください」

「違〜っつ〜っ！」

岩瀬は高橋へ宣言するように指をさした。

迫力に押され高橋は少し後ろへさがった。

大声に反応して職員室が静まりかえり、注目が集まる。

「むしろ我々が疑うべきは『世間の常識』でしょう。世間の常識？　普通？　はんっ、知ったことですか！　世間体という名の元にとれだけの少数派が差別されてきたか！　疑うべきは普通を振りかざす大人達、教師でしょう！」

「ろ、論点のすり替え……」

高橋は思い出した。

こんなこといつも言ってるから、岩瀬は一部の生徒に受けが良いことを。

言ってる事は熱いんだけど、どこか間違っているような気がする。岩瀬は拳を握り高々と天にかざす。

「基準は我にありっ！！ お姉ちゃんばんざーい！」

岩瀬の声が職員室中に響く。他の教師も皆、黙ったまま動かない、いや、動けない。

完全にこの場を支配しているのは彼だった。しかし……

「岩瀬先生」

彼を呼ぶ声と共に校長室と書かれたドアがゆっくりと開く。その途端、岩瀬は気をつけの姿勢のまま直立不動になった。

「は、はい！」

「ちよつとこつちへいらっしやい」

ドアから細く長い指がゆっくりと伸びて、岩瀬に向かって手招きをする。

「了解です！」

あれほど熱弁を振るっていた岩瀬がロボットのようなカクカクした動きで校長室へと向かう。

その光景をみて皆がため息をつく。

また夫婦喧嘩か……皆の気持ちは一つだった。

岩瀬は校長先生の夫なのだ。

ちなみに校長先生は三十代後半で校長職についての理事長の娘である。

ドアが閉められた直後、校長室から怒鳴り声が響いた。

岩瀬の喜びにも似た悲鳴を聞いて、職員室の皆が元の作業に戻った。

「はい。古賀かごめ、二十九点つと」

高橋の赤ペンには迷いがなかった。

第十一席「手の甲にメモ書き」ア コガレ

亜古河鈴町内にある唯一のコンビニ「阪野商店」

阪野将は親の手伝いをすべく、店員として働いていた。

「将、レジ頼む」

「あつ、はい」

品出しをしていた将はレジへと駆け寄る。

夕方のコンビニには学校帰りの学生やサラリーマン・OL等がいて賑わっていた。

当然レジにも列ができる。

「お待たせしました。お待ちのお客様、こちらのレジをご利用ください」

普段からコンビニの手伝いをさせられているので将は慣れた手つきでレジ打ちを始める。

通常のバイトよりも安い料金で働いてはいるものの、親が経営する店という気楽さもあって、よく手伝いをしていた。

「ありがとうございました」

なんとか忙しい時間も経過し、並んでいるレジの客もあと一人になった。

「いらっしゃいませ」

一瞬、将が客に目を向ける。客は二十代前半の女性に見えた。

かこの中にはお菓子やらペットボトルや雑誌が入っている。

いつもの動作で次々にバーコードを読み取っていく。

そんな将の視線の先にふとお客さんの手元が見えた。

ん？ 不思議と将は違和感を感じた。

「千九百七十八円になります」

客が財布から千円札二枚を取り出すと、将へと差し出す。

すると、親指と人差し指の間の甲に何か文字が書かれてあった。

忘れないように手の甲や掌へメモを書くことはたまにある。

お金を受け取る際にメモ書きが目の前に近づき、文字がハッキリと読み取れた。

『ろっ』『ムチ』

何、そのメモ書き。

将は不思議に思いながらも会計を終え、お釣りを渡す。

次いで、年齢確認のために女性の顔を伺うと、タイミングが合ったせいか、目が合ってしまった。女性は伏目がちだったが、確実に将を捉えていた。

だが、特に何も言わず女性は店を出て行った。

うーん妙に気になるなあ。

普段はお客さんと目が合ったぐらいでは別に気にならないのだが、手の甲のメモ書きのこともあり、心に引っかかりを持ってしまった。まあ、ネタとして話してみるか。

将と一緒に働いている吉見和哉に声をかけた。

「和哉さん、ちょっといいですか？」

「ん？ どうした？」

和哉はバックヤードで飲料の補充をしていた。

将の姉である阪野裕美と同棲している和哉は将にとって兄のような存在で良い相談相手となっていた。

「実は……」将はさっきの女性客について話をした。

「なにっ！ コンビニにSM嬢が!？」

「声が大きいですよ!」

別に将はSM嬢だと言っていないのだが、和哉は話が終わるや否や結論づけた。

「でも関係するような買い物はなかったけど……」

「将、ウチに『ろっ』『ムチ』は売ってないだろう」

「ですよね……」

「にしてもよくお客さんの手元の文字まで読めたもんだ」
確かに。

「まさか、お前に読ませるためだったりして」

「!?!」

それからしばらくは將の頭の中は悶々としていた。

三十分ぐらい後、一人の客が来店した。

「いらっしやいま……あつ」

「はあ、はあ、はあ……」

肩で息をしながら入店したのは、さっきのメモ書きの女性だった。將が女性に注目すると、彼女は店内を見渡し、すぐに彼と視線がぶつかった。

すると恥ずかしそうにうつむきながら再び店内を歩き始めた。

これは、真相を確かめるチャンスかもしれない。

將は商品整理を止め、レジに向かう。

女性は店内を回りながら数度、レジへと視線を向けた。

將はその度に視線を逸らす、どうしても注視してしまう。

走ってきたのか上気してい頬が赤い。さらに視線が後を引くような流し目。

同じコンビニに一日二回来るなんて、よっぽどウチが気に入ってくれているのかな。

自分であれば二回目は別のコンビニを探すなあ。などと考えていると女性はどんどん將へと近づいてきた。

とうとう再び將が待つ、レジへと向かってきたのだった。
「いらっしやいませ」

女性が商品を机に置く。

將は思わず「あつ」と声に出しそうになった。

一気に謎が解けていく感覚に襲われる。

目の前に置かれ物は『ういろう』と『キムチ』だった。

『ろっ』って『ういろう』か！

『ういろう』は将の父親が好きで、無理やり店内においてある商品だった。

『ムチ』って『キムチ』のことだったのか……

手の甲にかかれた文字は結局、部分的に書かれた文字に過ぎなかった。

「あの、ははは、買い忘れちゃった……」

将は特に聞いていないのだが、女性は恥ずかしそうに呟いた。

赤くなつて頬を指でかきながら、将をちらちらと見つめる。

女性は下唇をやや噛んでうつぶき加減、瞳は潤んで光って不安げにも見える。

年上だけどなんだか可愛く思え、将は微笑みながら見つめ返してしまった。

会計を終え、女性がお店を出て行った。

将が微笑ましくもなんだかホッと安心したのも束の間、背後から声がする。

「将。まさか、さっきのが例のSM嬢か？」

「いつの間に……はい。でもSM嬢じゃなかったですよ」

将はさっきの状況を話した。

話を聞いた和哉は腕組みをして何度も頷いた。

「なるほどなあ……だいたい、ココで売っているろっそくじゃあ温度が高すぎると思っただんだよ」

「詳しいですね」

「お前の姉ちゃんに鍛えられているからな」

「想像したくないです」

「いや、プレイはしたことないぞ」

「だから、想像させないでくださいー！」

「俺だけがMに目覚めたのだ」

身内のふしだらな想像はしたくない！
将は身震いがして自分を抱くような仕草をした。

「でも、彼女がお前の反応を見たかったのは確かだな」
「えっ」

「だってお前がレジ作業している姿をジーっと見てたからな。メモ書きの反応をうかがうみたいに」
「いやいや、まさか、まさか。」

心の中で否定する将に和哉が追い討ちをかける。

「さっきの目ツキをみるとありやMだな」

「でも、Mなひとが『ろう』とか『ムチ』とか書かないでしょ」

「おいおい、苛める側がわざわざロウソクやムチを忘れないように手の甲へメモするのか？ 几帳面な女王様なこと」

「だんだん和哉の言っていることが、将の中で現実味が増してきた。背中に冷たい汗が走る。」

「お前の好奇心な目にうつつとりしてたし」

「マジですか!？」

「マジ」

まさか店内回っていたときも、自分の視線に興奮してたのか!？
そして微笑んでた自分の事は冷笑する男に見えたのかもしれない。
いや、もしかしたら最初の会計のときから、わざと手の甲を見せようとしてたのかな？

今にして思えば思い当たる節が一杯ある。

でも、そんなことが興奮につながるのだろうか？

自分にはまだ理解できない世界なのかもしれない。

潤んだ瞳におどおどした表情を思い出した。

うっん。奥深い。

顎に手を当て考えにふけっていた将に聞きなれた声がかきこえた。

「おっす！ 買い物に来てやったぞ！」

店内にあらわれたのは古賀かごめだった。

将はかごめを一瞥すると、笑いながら受け応えする。

「いらっしゃい、お嬢ちゃん」

「むむむっ！ 阪野のくせに子ども扱いするな！」

こうして阪野将は一つ大人の階段を上がったのでした。

第十二席「すべてお見通し」ア 「コガレ

鶴来彩香つるまいあやかは亜古河鈴町に住む高校生である。

帰り支度を終え、二年一組を出て、三組へ向かう。

「かごめちゃん、待っててね」

鶴来彩香は理解者である。

理由については後で述べることにする。

彩香が三組を覗くと加奈とかごめがじゃれあっていた。

「赤点が三教科もあるんておかしいよ！ テストでは全力尽くしたのにつ！」

「自業自得だ」

「世間ではベストを尽くすことが大切だって言うじゃん！」

「お前はテストの時間だけベストを尽くすんだろっが！ 日ごろから勉強しろ」

鶴来彩香は二人のにぎやかな掛け合いが大好きである。

このまま近づかず、客観的に見たい衝動を抑えつつ、二人へ近づく。

「かごめちゃん」

「あっ、彩香ちゃん。うわっくん！ 眼鏡がいじめるよ」

「眼鏡だけど、眼鏡って言うな！」

鶴来彩香はかごめを猫かわいがりしている。

自分は一人っ子であるが、妹ができたような気分に浸れるからである。

「まあまあ、落ち込まないで。或奇目死アルキメデスでも行って落ち着こう」

「よし、行こうっ！」

かごめの機嫌はすぐに直り、すでにスキップを始めている。

加奈は周りを見回している。誰かを探しているようだ。

「あれ、彩香。まどかは？」
「まどかはね、今日は部活です」
「そうか、まどかは陸上部だったよな」
加奈と彩香が話している間にかごめは教室から飛び出していた。
「つたく、鉄砲娘が」
慌てて二人も後を追った。

或奇目死は和菓子屋である。

店内は入り口が対面販売になっており、奥が座敷になっていて和菓子とお茶を楽しむことができる。

「ちーす！」

かごめの挨拶が店内に響く。すると店の奥から女性が顔を見せた。
この店の女将である。

「あら、かごめちゃん達、いらつしやい」

かごめの声を聞きつけて、男が飛び出してきた。

「おう、かごめ来たな！いつものヤツ用意しておいたぞ！」

「さすが、おっちゃん！」

かごめがおっちゃんと呼んだのはこの店の主人である。

主人が一度店の奥へと引っ込むと再びお皿に乗った食べ物を持って出てきた。

「ほらよ！」

かごめの手に渡ったのは洋菓子のモンブランだった。

或奇目死は二百年ほど続く和菓子店である。

しかし、五代代目主人は和菓子に飽き飽きして、洋菓子の修行に海外へ行った経験を持つ。結局は店を継いだのだが、洋菓子への未練は残っていた。

主人の事情を知ったかごめが半年ほど前に「モンブランが食べた」とメニュー外の注文をし、洋菓子魂に火がついた主人は、以後

かごめが来店することに和菓子でなく洋菓子を提供するのが習慣と
なっていた。

ちなみにモンブランはかごめの大好物である。

かごめは主人からモンブランを受け取り、他の者は和菓子を一品
ずつ注文し、奥の座敷へと向かう。

皆、それぞれに頼んだお菓子を口にする。

甘いものを食べると四人とも笑顔になるのだった。

さあ、甘いものも食べたしそろそろかな

彩香は耳を済ませた。

すると加奈がかごめのモンブランに対して文句を言い始めた。

「ったく、お前はいつも和菓子の店で変なもの頼んで……」

「頼んでない！ おっちゃんと私がモンブランを求めた。それでい
いじゃないか！」

「はあ……」

『モンブランも美味しそうだな。とは言え、文句言っちゃったし
なあ』

加奈は心の中でも現実でも小さいため息をつく。

かごめは加奈のため息を見逃さなかった。

「今、ため息ついたね。モンブランを馬鹿にしたね」

「してない」

「したっ！ 馬鹿にしたね……ううううっ、オヤジにも馬鹿にされ
たことないのにつ！」

かごめのモンブラン魂に火がついてしまった。彼女は立て膝をし
て加奈を指差す。

「モンブランはね栗が織り成す芸術なんだよ！」

「はいはい、うるさい、うるさい」

『本当はモンブランが欲しいだけで、ちょっかいをだしたただけなの
に……』と虚勢を張る加奈。

彩香は加奈を見つめ、思いついたように指を鳴らす。

「どれどれ、かごめちゃん、ちょっとちょうだい」と言いつつ、かごめのモンブランを一口もろうことにした。

「はい、加奈ちゃん。どうぞ。あ〜ん」

一口すくったモンブランを加奈の前に差し出す。

「えっ!? あーん」自然の成り行きで加奈の口にモンブランが入っていった。

モグモグと口を動かしながら『おっ、たまにはココで洋菓子食べるのも悪くないな』などと加奈はまんざらでもない感想を心の中で述べる。

加奈の姿をみて彩香は満足そうに頷いた。

「あ〜、彩香ちゃん! 加奈カナには食べさせちゃ駄目だよ!」

「だって〜、加奈ちゃんに理解してもらいたかったんだよ〜」

かごめのモンブラン熱はさめず、再び加奈を攻撃した。

「加奈カナはケーキの上に乗っている栗が目当てなだけですよ」

「勝手に決めるな」

「この上に乗っている栗は飾りですよ! 眼鏡の人にはそれがわからんのです!」

「誰が眼鏡じゃ! 私の成分は眼鏡だけか! 新八かつ!」

「新八の方がましなツツコミするよ! モンブランを馬鹿にしないよ!」

「言わせておけば……私が新八以下だと……」

鶴来彩香は一人っ子である。普段家では一人きりである。

ゆえにかごめと加奈の会話を聞いているだけでも楽しい。

しかし……

『くそっ、例えツツコミのせいで話が逸れていく』と加奈は自分の突っ込みを後悔し、『加奈ちゃん、GダムからG魂の新八へのボケには無理があるよ』と、かごめもボケに苦慮していた。

しょうがないなあ。彩香は加奈とかごめの間に割って入った。

「はいはい、二人とも。新八君はG魂を知らない人にはまったくわからないからモンブランに話を戻してね」

二人は彩香を見つめ、ホツとする。

かごめは「もとい」と話を再開した。

「モンブランの素晴らしさを教えてあげる！ あのね、この黄色いクリームみたいなのが、栗のハーモニーを……」

「あのだ」

加奈は自分の頬を指でかきながら、かごめの言葉をさえぎる。。

「前から言おうと思っていただけ、その黄色いのは栗じゃなくて芋だ」

「えっ!?!」

かごめは加奈の言葉に動きを止めた。

同時に心の中で彩香は数を数える。

いゝち、にゝい、さゝん、よゝん、ごゝ……

数秒後、かごめが再び動き出す。

「はっ。今、記憶が飛んだ」

「記憶が拒否したのか」

まあ、私が数えても三十秒固まっていた。新記録

鶴来彩香はかごめの挙動を観察するのが大好きである。

「もう一回言っぞ」

加奈が芋宣言を繰り返そうとすると、かごめは素早く耳を塞ぐ。

「あわわわ、聞かない聞かない聞かない聞かない聞かないわわわわ」

「かごめちゃん」

「なに？」

「聞こえてるじゃないか」

「加奈カナの声だけは聞こえない仕様です。で？ なに、彩香ちゃん」

かごめの言葉にムツとし、眉間にしわを寄せる加奈。

彩香は加奈の表情を見逃さなかった。この雰囲気丸く治める方法は……

「かごめちゃん。聞きたくないなら、『今日、耳日曜』って言えば効果的よ」

「えっ……」

「うっ……」

鶴来彩香はかごめに助け舟を出したつもりが、しばしば場を凍らせる。

しかし、半分以上は雰囲気のリセットするためのものだった。

かごめは顔を赤くしながら彩香の言うとおりにボケる。

「み、耳日曜だから……ね」

「恥ずかしいならいうなよ！」

加奈も笑いながらツッコミを入れる。

どうやら彼女のご機嫌も少しは戻ったようだ。

彩香は微笑み、かごめへと向きなおす。

「無理なボケはいけないわ、かごめちゃん」

かごめの瞳が潤んで、泣きそうになっていた。

明らかに加奈は心で『お前が言わせただる！』と言ってたが、

彩香は気にしないことにした。

「かごめちゃん、いくら栗だと思っていた原材料が芋だったからってすねちゃだめよ」

「うわっ、ハッキリ言ったよ！」

「うっっ」

さらにかごめの瞳に涙が溜まっていく。

やがて涙の決壊が瞳からあふれてた。

「うわーん、騙されたっっ！ オヤジに文句言ってくるっっ！」

「いや、別にモンブランってそんなもんだろ！」

「栗詐欺だあ、世間の目は騙せても、かごめ様の目は誤魔化せな

い！」

「思いつきり騙されてただろうが！」

「うわ〜ん！」

加奈のツツコミを無視してかごめは店の奥へと走っていった。

これで万事解決ね。彩香はほくそ笑んだ。

鶴来彩香は理解者である。

それは甘いお菓子を食べたきっかけで人の心が読めてしまうからである。

第十三席「久しぶりに走り回った気がする（前編）」ア コガレ

かごめは足早に目的地へ向かい歩いてきた。

「寒い……こんな日にはコタツに入って又クヌクしたいのに」

彼女が文句を言いながらも外出したのには訳がある。

その用件は自分に関係することなので、しかたなく歩いているのである。

「うー、子供は元気だのう」

亜古河鈴小学校の前を通り過ぎた時、グラウンドでサッカーをしている小学生達を見かけた。

なぜ小学生はこんなに寒いのに走り回れるのだろうか？ 半ズボンもいるし。

かごめが取り留めのない事を考えながら通り過ぎようとする。

「あつ、かごめ〜〜!!」

グラウンドから手を振る小学生が一人。かごめは小学生に見覚えがあった。

「ん？ アレはカナリア常勝軍団の一人……」

かごめに声をかけた小学生が走り寄ってくる。

その小学生とは飯野加奈の弟、飯野吉生いしのよしおだった。

「おーっす、ヨシオ！」

「かごめ、ナイスタイミングだ！」

「つーか、女子高生に向かって呼び捨てとはなんだ〜〜！」

「まあまあ、ちょっと頼みごとがあるんだよ」

「断る。私は今から行くところがあるのだ」

「実はメンバーが一人足りなくてさ」

「話しきけよ」

無理やり進行するところなんか加奈そっくりだな。

と顔を引きつらせるかごめだった。

結局、かごめは吉生の話を聞くことにした。

すると、今まさにサッカーの試合をするところだが、人数が一人足りないという。

「まさか、こんな寒い中、私にサッカーをやれというの？」

「お願いっ！」

「嫌だよ。なんで女子高生が小学生のサッカーに混ざらなきゃいけないの？」

「だって、人数揃わないとお前らの負けだって言うんだよ」

「なるほどねえ……」

頷きながらも立ち去ろうとするかごめに吉生は手を合わせて何度も頼んだ。

かごめは本当の目的地に行くことの気が進まないのも手伝って、吉生の話に少し乗ってみた。

「だいたい、女子高生入れなきゃいけないほど、なんでそんなに真剣なの？」

「隣のクラスと来月の昼休みのグラウンド使用权をかけてるから」

「は？ そんなの交代でやればいいじゃん」

「姉ちゃん、小学生のグラウンド争いを甘く見ないで欲しいなあ」

「ほ、さよけ」

小学生の休み時間におけるグラウンド争い、遊具争いは激烈である。かごめには忘れかけていた記憶だった。

「とにかく、ね、お願い！」

何度も頭を下げる吉生にかごめは顎に手を当てて考えた。

考えている内容はもちろん『交換条件は何か』である。

引き受けるにしても対価が欲しい。小学生相手にも容赦ないかごめであった。

数秒後、かごめは思いついたのか、手をぼんと打った。

「そうだ！ ん〜じゃあね、加奈の秘密を三つで手を打とう」
「姉ちゃんの秘密？」

「家での加奈の間抜けエピソードを三つほど教えてもらおう」
「ん〜、間抜けって言われてもなあ……」

吉生は加奈のエピソードなら持っている。

しかし、後で加奈にバレた時の厄災とサッカーの試合を天秤にかけていた。

「あるでしょ？ 朝、寝ぼけてパジャマのまま家を出たとか」

「そんなのかごめだけだよ」

「なぜそれを知っている！」

「姉ちゃんに教えてもらった」

「ぐぬぬ……私の権威失墜は加奈のせいだったのか〜っ！」

かごめは瞳に涙をためながら拳を振り上げて怒った。

吉生はかごめを見て『小学生みてえだな』と呆れる。

「かごめ。心配しなくても初めて会った時から呼び捨てだったよ」
「むきーっ！ もう知らねえ！ 小学生は家で携帯ゲーム機使ってゲームでもしてろっ！ もやしっ子になれ！ 珍しくサッカーしてるんじゃないよ！」

半泣きになりながら、かごめは「うわ〜ん」と言って立ち去ろうとする。

もやしっ子って何？ という疑問はあったものの、吉生は懸命にかごめを引きとめた。

「わわわわっ、かごめ悪かったよ！ 姉ちゃんの秘密教えるからさあ！」

答えと同時にかごめの口から「フッ……」という声が漏れる。

吉生はかごめの罠だと気づいた。

「……五つだ」

「へ？」

「五つ教えてくれるならやってもいい」

振り向いたかごめの瞳にはやっぱり涙が溜まっていたので、やっぱり本当に怒ってたんだと吉生は思った。

「増えてる……わ、わかったよ。教えるからさ」

「ふふふ、交渉成立ね。わははははっ！ 見てろ加奈力ナ、下克上じゃ！」

かごめは仁王立ちし、声を上げて笑う。

吉生は彼女見て「姉ちゃんも大変だなあ」と同情した。

かごめを連れて来た吉生を見て、隣のクラスの連中から文句がでた。

しかし、結局は皆が試合がしたいので許可された。

「ちっ、しょうがねえな。どうせ女だし大した戦力にならねえだろ」

「な、なんだと、このクソガキが。女子高生なめんな！」

「かごめ、揉め事は起こさないでよ！」

吉生に抑えられ、かごめはなんとか小学生相手にケンカという事態を回避した。

「じゃあ、姉ちゃんはディフェンダーやって」

「でふえんだー？」

「……とりあえずゴールキーパーの前あたりで動かないで」

「了解した」

攻撃側に姉ちゃんが来るとケンカになりそうだし、ここは大人しく後ろで待機してもらえれば……

吉生の頭の中では、いかにかごめがゲームの邪魔にならないかの算段が行なわれていた。

ちなみに吉生はミッドフィールダーで司令塔の役割を負っている。

すぐに試合は開始された。

小学生にしてはパス回しが多く繰り出され、中盤での押し合いになっっていた。

「もっとラインを上げる」

「後ろにボール戻せよ。サイドチェンジを意識して！」

吉生は自分のクラスを組織だててサッカーをするチームにまで育て上げていた。

規律を守って動く選手を見て彼は満足げに頷く。

相手のフォワードが吉生チームのディフェンスライン付近で飛び出すのを待っているのを彼は確認した。

フォワードに反応した相手選手が縦パスで一気に相手陣地へボールを送り込む。

「今だ、オフサイドトラップ！」

吉生の号令と共にディフェンス陣がラインを一気に押し上げる。

相手チームのパスよりも早く、フォワードが飛び出してしまった。パスした場合に先頭にいる選手は、相手チームのディフェンダーよりゴールに近づいてはいけない。

このままではオフサイドという反則が相手チームに与えられる。

「やった！ オフサイド」

「よっしゃこーい！」

吉生の目に映ったのはディフェンスラインの遥か後方で、野球の外野手のように大また開きで構えているかごめの姿だった。

「かごめのこと忘れてた〜〜！」

フォワードはパスを受け取り、かごめとキーパーしかいない相手陣内に切り込む。

かごめは小学生の動きに付いていけず抜かれてしまい、あっさりゴールが奪われた。

外人の様に両手を広げ「なぜ？」というジェスチャーで吉生はかごめに近づく。

「かごめ！ サッカーにはオフサイドっていうルールがあって、ディフェンスラインと一緒に動いてくれないと困るんだよ！」

「動かなくていいって言ったじゃん！」

「指示待ち族！？ 空気読んでよ！」

「うっ、もうわかったよ……それとルールの話はいいよ、どうせわからないし」

「だめだよ！ 同じことが起きるじゃないか！」

「姉弟揃ってうるさいなあ」

頭をかきながらかごめはため息をついた。

「大体小学生が組織的サッカーなんかしないでいいの！ トータルフットボールなんて百年早い！」

「かごめ、絶対サッカーのルールを知ってるだろ……」

「うるさい！ キャプテン翼でも読んでドライブシュートの練習しろ！ ゴールネット突き破るようなシュートを夢見る！」

「キャプテン翼……？ なにそれ」

「はっ、キャプつばはもう古いのかっ！ じゃ、じゃあ、イナズマイレブンの真似して正義の鉄拳とか練習しろ！」

「いや、あれはゲームだしさ」

「うわっ、さめてる！」

かごめの脳裏には「夢は公務員」とか言う小学生が頭に浮かんでいた。

「夢は大事だぞ。私だって魔法少女になる夢は頭の片隅にまだ……」

「いや、高校生でそれはまずいでしょ」

このままでは自分の理想のサッカーができそうにない、と感じた吉生は頭をめぐらせる。

あれほど頼んで入ってもらったにもかかわらず、すでに邪魔者化していた。

「もう、いいよ。かごめはキーパーして！ 邪魔しないでよ。立ってるだけでいいから」

「なぬっ！？」

かごめのリアクションを無視して、吉生は背を向けて歩き出す。

彼の落胆と同時に口に出してはいけない一言が飛び出してしまふ。

「これだから女子は使いづらい……」

「コンチクシヨ　　ッ！！　クソガキがっ！　女子をバカにすんな
っ！！」

かごめは両手の拳を振り上げ、叫んだ。

なんか昔に戻った気がする！　阪野にも小学生の時言われた！

いつも邪魔者扱いされた！　あの時は石投げて奴を泣かせたけど。
くそ〜っ。

ゴールポストまで歩きながら、かごめは奥歯をかみ締める。

「見せてやるうじゃない、女子高生の底力を！」

サッカー小説なのこれ？　という余韻を残しつつ次回に続く！

第十四席「久しぶりに走り回った気がする（後編）」ア コガレ

試合が再開され、吉生を中心にパスをまわす。

かごめはゴールポストにもたれながら状況を眺めている。

「『見せてやるうじやない、女子高生の底力を！』とは言ったものの……」

ため息をついてグラウンドに落書きを始めた。

しかし、まどかのようにには上手く描けず、すぐに飽きる。

「なんかつまらんなあ……」

やはり動かないと十二月の空では寒さが身にしみた。

うう、もう帰りたい。小学生は化け物ですよ、寒さなんか気にしてないもん。

かごめが寒さに鼻をすすった時、背後から大声が聞こえた。

「かごめ！ そっちいったぞ！」

「え！？ マジ！」

吉生の声に振り向くと、いつの間にか自分の近くまで相手側の選手が近づいてきていた。

周りにはディフェンダーがいたものの、構わずシュート体勢をとる。

かごめは半身の体勢で空手のような構えを取り、シュートに備えた。

「よしっ、とつてやる！！」

シュートが放たれ、かごめに向かって一直線に伸びてくる。

ボールが回転し、勢いよく彼女へ迫る。

「かごめ、キーパー正面！」

「おっしや、私のマジン・ザ・ハンドを今……」

いやいやいやいや、ボールが音を立てて迫ってくるよ！

これヤバイよ！ 小学生ヤバイよ！

止める気満々だったかごめのやる気ゲージが一気に下がる。

「んぎゃ〜っ!! やっぱり怖い!!」

「逃げた　　!!」

かごめはサイドラインまで走り去り、ボールは無人のゴールへ吸い込まれた。

「やった〜っ!　ゴ　　ル!!」

「かごめ!!」

サイドラインまで逃げたかごめは、おでこを腕でぬぐいながら、清々しい表情で呟く。

同時に半泣きになりながら吉生が走り寄る。

「いや〜、危うく当たるところだった。私のマジンがマジで死ぬところだったよ」

「当たってよ!　お願いだから当たってよ!　キーパーは当てなきゃ意味ないんだよ!」

「え〜っ、痛いし」

「それがキーパーの仕事でしょうがっ!」

「うわ〜っ、そのツッコミ加奈そっくり。」

かごめはジト目で吉生を見るが、彼は気にしていなかった。

「とにかく、頼んだよ!　点数入れられただけエピソード減らすからね!」

「卑怯者っ!　そんな契約なかっただろ!」

「駄目!　じゃなきゃ、かごめはやる気出さないだろ!」

「うっ……」

丸め込めるところも加奈そっくり。

さすがはカナリヤ軍団。

かごめは渋々ゴール前まで戻ってくる。

試合が再開され、かごめはゴール前に腕を組んで戦況を見つめる。

彼女はとある疑問が取り払えなかった。

それは、なぜこんな短時間に吉生チームが攻められてるのかである。

自分のせいで点数を入れられたのは、しょうがない。(かごめの中では)

でも、かごめは自陣深くの守備である。攻め込まれないと機能しないのだ。

確かに吉生は懸命に指示して、クラスみんなは動いている。

だけど、「ミスしないように」と必死に見えた。

「楽しんでるかね、小学生諸君」

(このままでは何もしない間にエピソードが減らされてしまう。)

かごめはシュートを止める気がないらしい……)

「むぐ。やはりキーパーは性にあわん」

かごめは顎に手を当て、不敵な笑みを浮かべた。

「もっと早くパス回しをしないと駄目だよ！」

吉生はクラスの皆へ指示を出すので懸命だった。

くそつ、テレビの選手だったらもっと動いてくれるのに！

自分の理想に対してのギャップを埋めることができず、歯がゆい思いになっていた。

再び吉生にボールが渡り、パスコースを探した。

誰もいて欲しい場所にいない。

「吉生が途方にくれた時、背後から大声が聞こえた。」

「私の人生に守りなど考えられないんだよ！」

「かごめ!?!」

吉生が振り返ると自分へと走ってくるかごめの姿が見えた。

「ヘイ、ヨーシ！ヘイ、ヨーシ！パスパスパス！」

体系をまったく無視して走ってくるかごめに吉生の目は点になる。

「キーパーだろお前はっ!!」

「うるさいっ！ 攻撃は最大の防御なりっ！」

吉生に向かって宣言すると彼を一気に抜き去り、相手ゴールに向かって進んでいく。

無茶苦茶だ！ かごめを入れたのが失敗だった！

心の中で吉生は頭を抱える。

「これが女子の底力じゃない！」

だめだ！これ以上かごめを走らせるとオフサイドになる！
くそっ、どうにでもなれ！

吉生はかごめのタイミングにあわせて縦パスをだした。

パスは見事に決まり、かごめの足元に転がった。

「よし、後は落ち着いてそのままドリブルだ！ キーパーを交わせれば一点……」

「ドライブシュート……！」

「シュートかよ……！」

かごめの放ったシュートはゴールの遥か上空を飛んでった。

ちなみにかごめの靴は相手ゴールのネットを揺らした。

「なんでいきなりシュート打つんだよ！」

「へ？ この線から中に入っちゃ駄目なんだよね」

「ここはペナルティーエリアの線だよ！」

「でもキャプテン翼では……」

「もう、マンガから離れてよ！ しかも外れたじゃん！」

片足で跳ねながらゴールにある靴を拾いに行くかごめ。

自分の計画通りに行かない苛立ちをかごめにぶつけるべく、吉生は彼女に近づく。

「ひどいよ、かごめ……！」

吉生の文句を背中受けてつつ、かごめは靴を履いている。

「もーわかったよ……でもさ、ヨシオ」

「なんだよ……！」

「走り回るっていいな！」

「え？」

「楽しいな。もっと走りたい気分だ！ わはははっ！ 自由ばんざ

ーい！」

自陣ゴールへ走って戻るかごめ。

大声を上げながら吉生チームの選手の背中を叩いていく。

「かごめ……」

「ぶはっ！ なんとなく久しぶりに走り回った気がする！」

なんでそんなに楽しそうにしてるのさ。こんなに俺は悩んでるのに。

なんか、馬鹿馬鹿しくなってきた。

鼻を鳴らして吉生はかごめに大声で呼びかける。

「よし。かごめはフォワードに入ってよ。どんどんゴールを狙って！」

「マジで？ ……任せんしゃい！」

試合は続行され、勢いを取り戻した吉生チームは一点を取り返したが、結局一対二で負けてしまった。

試合には負けたものの、自由に走り回った吉生チームの小学生はどこか楽しそうだった。

かごめは「ぜったい明日筋肉痛だわ」とか言いながら帰り支度を始める。

吉生は頭をかきながらかごめに近づく。

「かごめ、今日はありがとう」

「ん？ それほどではないよ」

確かにそれほどではなかった。一点を入れたのも吉生だったし、あの後もチームを引っ掻き回し続けた。

だけど、吉生は礼を言わなくてはいけなさと感じていた。

「ヨシオ、例の約束を忘れないでよ！」

「わかってる」

「よしっ！ 下克上じゃ！」

「ところでさあ、かごめはなんで小学校の前歩いてたの？」

「え？」

吉生の質問に動きを止めるかごめ。

十秒間そのままの体勢でいた。（吉生が観測）

「はっ！？」

急に思い出したのか、身体がびくつと揺れる。

かごめが携帯の履歴を確認すると数十件加奈からの電話があった。

「加奈の家で勉強会するんだった！（私の追試対策で！）」

一方、飯野家では加奈が唸るように

「かごごごめー！！」

「まあまあ、加奈ちゃん抑えて抑えて」

彩香が加奈をなだめる横でまどかは火山噴火の絵を描いていた。

絵のフキダシには「怒り心頭っ！」と書かれてあった。

第十四席「久しぶりに走り回った気がする」（後編）「ア コガレ（後書き）

活動報告（12/12分）に今週の「ア コガレ」口メモを載せました。

よろしければお読みください。

第十五席「兄妹×姉妹×兄弟」ア コガレ

今日の舞台は亜古河鈴中学校、二年二組である。

午前中の授業が終わり、皆が弁当や購買で買ったパン等で昼食をとり始めた頃。

「古賀、ちよつといいか」

古賀瑠璃の元へ一人の男子中学生が声をかけた。

「ん？ 飯野君どうしたの？」

「昨日弟が夕飯まで世話になったそうだな」

声の主は飯野真彦^{いいのまひこ}。飯野加奈の弟、吉生の兄である。

瑠璃とはたまたま同じクラスになっただけで、あまり話すこともない。

しかし、彼の姉弟が世話になったときは律儀にお礼を言いに来てくれる。

「ああ、吉生くんだね。いいえ、大したお構いもできませんで

「『夕飯美味しかった』と伝えてくれと言われたから」

「あゝはいはい。わかった。どういたしましてって言うておいて

「ああ、ありがとう。それと迷惑をかけた」

昨日、かごめと吉生はサッカーが終わった後、かごめは用事を忘れたフリして自分の家に帰って夕飯と一緒に食べたのだ。

もちろんその後で、加奈が古賀家へ殴りこみに行ったのは言うまでも無い。

真彦は百八十センチの長身が直角に曲がるまで頭を下げた。

「いつも迷惑をかけてすまん」

「いえいえ、こちらこそ。楽しかったよ、私はね」

瑠璃も負けじと深々と頭を下げた。

「いやいやこちらこそ」

「いえいえこちらこそ」

この二人が揃うとなぜか頭下げ合戦になってしまっ
律儀ども同士の悲しいサガである。

数分後、頭下げ地獄から抜け出した瑠璃は自分の弁当を取り出し
机に置く。

「さっきのつて飯野だよね」

「うん、それがどうしたの？ 明菜ちゃん」

瑠璃の机と机をあわせて向かいに座るのはさかのあきな阪野明菜だった。

阪野将の妹である。

二人の付き合いはお互いの姉兄同士が幼馴染だった頃から続いて
いる。

「アイツがいたせいで、近寄れなかったし」

「できれば助けて欲しかったな……」

すると明菜は茶髪の髪を指に絡ませながら、めんどくさそうに言
う。

「いや、アイツってガラ悪そうじゃん。声かけにくいっの」

「それは誤解だよ。さっきもね、加奈さんと吉生君のお礼を……」

「おっかなそうな外見は変わらないでしょ。ウチの兄貴とは大違い」

「はいはい、またその話ね」

明菜の話聞きつつ、弁当のフタを開ける。

しばらくはずつと明菜の話が続きそうだ。

瑠璃はプラスチック製のフォークで弁当のおかずを取り上げた。

数分ずつと明菜の話が続くと、瑠璃はなんだか面白くなってきた。

「……でさあ、兄貴の奴が」

「ねえ、明菜」

「なに？」

「ホントに明菜は将さんの話ばかりするよね」

「ちょww……ば、馬鹿なこといわないでよ！」

顔を真っ赤にさせて照れている明菜をみて、微笑ましい気持にな

る。

明菜は肩にかかった茶髪を指に絡ませる。

さらに口を尖らせて弁解した。

「べ、別にお兄……兄貴のことなんか何とも思っていないんだからね！」

「こんな言葉も瑠璃には「大好き」と言っているようにしか聞こえなかった。

「今日もお兄さんにお弁当作ってあげたんでしょ？」

「はあ？　なんで私が。あんなヤツ、コンビニの弁当で十分だつっのー！」

「ふん」と言っつてそっぽを向く明菜の指先を瑠璃は見逃さなかった。

「それにしては指にまた絆創膏をつけているような……」
「やつ……み、見ないでよ」

指を胸元に引き寄せ、隠すように手を重ねる明菜。

顔は蒸気が出そうなくらい赤くなっている。

瑠璃はくすつと笑いながら、彼女をからかった。

「で？　少しは上手くなつたのかね？」

「あー、無理無理。母さんもコンビ二行ってるから教えてくれる暇もな……」

「なるほど、やっぱり作ってるんだね」

「あ~~~~つ、今のウソ、聞こえない、聞こえない！」

「あのさ、今……」

明菜は両手で耳をふさいで聞こえないフリをする。

瑠璃は彼女のわかりやすい身振り手振りが大好きだ。

ツンデレとはよく言うが、明菜の場合はツンが少ないツンデレである。

「わ〜わ〜聞こえないー！」

「ちゃんと聞いて」
「絶対聞かない。あゝあゝ！」
「今度ウチに来る？ 私でよければレクチャーするよ」
「マジ!？」
信じられない勢いで瑠璃の顔へ自分の顔を近づける。
「さとう必死のようだ。」
「く、食いつきいいね……」

瑠璃の言葉に明菜は顔を引き戻し、頭をかきながら横を向いた。
「いやゝ、瑠璃の弁当はホントに美味しいからね」
照れながら人を褒める姿見る瑠璃。
明菜の場合、照れいるほうが、本当に褒めてもらっている証拠だ。
「じゃあ、しっかり勉強していつてね」
「ふふつ、見てろゝ三学期は必ず美味しいと言わせてみせる！」
「ホント、お兄ちゃん好きだね」
「違っつて！ もゝっ！」
「はいはい、わかりました」

今度は明菜がジト目で瑠璃を見つめながら反撃する。
「そういう瑠璃だつて、あの馬鹿姉の話ばかりするじゃん」
ちなみに明菜はかごめのことを眼の敵にしていた。理由は兄である将と幼馴染として気軽に話しかけるからである。
瑠璃は一瞬眉を吊り上げたが、すぐに表情を戻した。
「お姉ちゃんは馬鹿じゃないよゝ」
負けじと明菜はからかう。
「いや、馬鹿だよゝ」
「いやいや、馬鹿じゃないよゝ（女）」
「絶対馬鹿だよゝ」
「絶対馬鹿じゃないよゝ（女又）」
「運命的に馬鹿だよゝ」

「運命的に馬鹿じゃないよ〜（怒）」

「必然的に馬鹿だよ〜」

明菜の声と同時に机を叩く音が響く。

「馬鹿じゃないっ!」

「ひっ!」

「うっ!」

瑠璃は犬のように唸った。

明菜には彼女がかごめの忠犬のように見えた。

可愛いが、怒った勢いは感じる。

「ご、ごめんなさい」

明菜があやまると瑠璃はすぐにニッコリと笑みを返した。

「わかればいいよ」

瑠璃も明菜に負けじと姉好きだった。

再び弁当を食べ始める二人。

明菜は先程の話をまとめようとしていた。

「で、料理修行に早速今日行っていい?」

「早っ。さっき三学期から驚かせるって……」

「いいじゃん、いいじゃん、膳は急げって言うじゃん」

「膳じゃなくて善だよ。じゃあ、私が明菜の家に……」

「それじゃあ、兄貴にバレるじゃん! 驚かないじゃん!」

「でも、私の家にはお姉ちゃんいるよ」

「うっ……」

怯んだ明菜に瑠璃は覗き込むようにして見つめた。

「我慢できる? からんだりしない?」

「あっちから来なければ……我慢する」

明菜の気持を知ってか知らずか彼女が家に来ると、かごめのテンションが一段階あがるのだった。

その度に二人は衝突する。

「うーん、お姉ちゃんが我慢するなんてのは……厳しいかも」

「でしょ？ だってアイツ猿じゃん！ イタズラ猿の領域じゃん！」

「明菜くっくっくっくっ」

瑠璃は明菜に対する怒りを手に持っているプラスチック製のフォークに集中させ、今にも折れん勢いで曲がっていた。

「……ごめん」

瑠璃、私の味方なの？ 敵なの？ どっち？

明菜は謝りながら、「ホント、シスコンなんだから」と自分を差し置いて呟く。

「瑠璃、私の家に来てもお兄ちゃ……兄貴には会わないですよ」

「大丈夫だよ。興味ないもん」

「はああああああっ!？」

微笑む瑠璃に対して、明菜は机を叩いて応戦した。

三者三様シスコン、ブラコンさまざまである。

第十六席「姉だから絶対姉政」ア「カレ

ここは和菓子のお店、或奇目死。アルキメデス

いつものようにいつものメンバーが集まっている。

「あゝ、腕が凝ったなあ」

「うっ……」

加奈は向かいに座っているかごめへ自分の腕を伸ばす。

かごめは無言のままジツと加奈を見つめる。

「あゝ、腕がだるい、誰か揉んでくれないかなあゝ」

「うっ……」

「あゝ……」

「わかったよ、もう！」

かごめは食べかけのミルクフィードを机に置き、加奈の腕を揉み始めた。

「あゝ効くなあ。日曜日に待ちくたびれたせいで、腕が凝ってたんだよ」

「もういいじゃん！ 追試も無事に終わったし、勉強もしたじゃない！」

「駄目だ、当分許さない」

「ふえゝん、彩香ちゃん。なんとか言つてよ」

かごめに言われた彩香は人差し指を口元にあてて、「そうねえ」と目を細めながら答える。

「でもねえゝ、今回はしょうがないかな。次、私の腕もね」

「ええええっ！」

こうなったのも理由がある。

日曜日、かごめのため加奈の家で勉強会を開いたのにもかかわらず、かごめが現れなかったのだ。

我慢できなくなった加奈が夕方、かごめの家まで文句を言いに向

かったのだった。

以下、加奈の殴りこみの記録。

古賀家の玄関を開けた加奈は大声でかごめを呼び出す。

「出て来い、かごめ！ ふざけるのもいい加減にしないしなさいよ！」

「ふふふつ、よく来たね」

約束を破ったのにもかかわらず、かごめは家の奥からゆっくりと歩いて現れた。

「ずいぶん余裕があるね。サボったにもかかわらず」

「こちらには奥の手があるのでね」

弁解の言葉もないかごめに、加奈の怒りメータがマックスを迎えようとしていた。

「なんでサボった？」

「自由が欲しかったのだよ！」

「だったら、赤点取るな！」

「うつ……しかし、これを見てまだ減らず口をたたけるかな？」

かごめの後ろからゆっくり顔を見せたのは、加奈の弟の吉生だった。

「吉生、お前なんでここにいるんだよ」

「えへへ……」

吉生は笑って誤魔化しているものの、口元は明らかに引きつっていた。

加奈の剣幕に恐怖しているのだ。

かごめは吉生の恐怖など知らないので話を続けた。

「人質を返して欲しくば、今日は大人しく帰ってもらおう」

「え？ 俺、人質？」

「なに言ってるんだ？ かごめ」

「いいのかな、大切な弟がどうなっ
言い終わらないうちに、加奈は持ってきた鞆に忍ばせた教科書を取
取り出し、かごめの頭を叩いた。
不意をつれたかごめに教科書が直撃し、「ふごっ」と声をあげて、
うずくまる。

「痛　　っ！！　暴力反対！」

「人質とつたくせに偉そうなこというんじゃない！」

加奈はかごめから吉生へと視線を向ける。

吉生は勢いに負け、少し後ずさる。

「吉生、アンタまでなにやっての！」

「姉ちゃん、違っただよ！……この高校生にそそのかされたんだ
！」

「ええっ！？　冤罪だあ〜！」

涙目になって吉生に抗議するかごめ。

加奈は口端を吊り上げ「ふん」と鼻を鳴らす。

「どうせ、吉生が『遊ぼうぜ』なんて誘ったんだろ！」

「はわわわ……」

加奈は玄関を上がり、ずかずかと吉生の前まで歩くと仁王立ちし
た。

吉生はわなわなと震え、加奈を見上げる。

「お前の大好きな正義の鉄拳だ！」

加奈のゲンコツが吉生の頭を捕らえた。

「痛えええっ！」

「かごめはね、逃げる口実がなけりゃ、サボりなんてする度胸はな
い！」

「誤解が解けて嬉しいけど……す、素直に喜べない気がする」

かごめは最悪の事態を乗り切ったと思い、加奈へ近づく。

「でも、いいや。加奈ちゃん、さすが我が心の友よ！理由があつて行けなかつたんだって、わかってくれたんだね？」

しかし、加奈はかごめを睨みつける。

「誘いに乗ったアンタも悪い」

「お、お怒りじゃあ、カナリア様がお怒りじゃあ……」

加奈はかごめと吉生を交互に見渡すと、ため息をついた。

もう、どっちも小学生に思える。（吉生は小学生だけど）

「吉生は家帰ってから怒るとして」

「あ……ああ……ああ……」

吉生の怯えっぷりを見てかごめは考えた。

ヨシオがクリンのように怯えている。

飯野家での加奈は一体どんな振る舞いを？

「じゃあ、かごめ。これから……」

まだ、かごめの考察は続いていた。

はっ。まさか絶対王政なのか？

ヨシオは圧政に苦しむ農民なのか？

ありえる。ツッコミ女王、加奈なら。

「ちよつと、かごめ聞いているの？」

「ふは……絶対王政……いや、姉だから絶対姉政？」

すこしだけ別世界に飛んでいるかごめ。

再び加奈の怒りゲージが満タンになっていく。

「かごめっ！」

「はいっ！」

直立不動に立っているかごめをジト目で見つめる。

「まずはアンタから。さて、どうしてくれようか」

「あわわわ……どうするつもり？」

「決まってるだろ、お前の一番嫌がることをするんだよ！」

すぐにかごめのポケスイッチが入った。

「殴るんだね？ 親父にもぶたれ」

彩香のフォローと同時に、かごめの携帯から着信音が聞こえた。
「ん？ 電話だ」
携帯を見ると、瑠璃からの電話だとわかった。

第十七席「かごカナ同盟」ア コガレ

和菓子のお店、或奇目死アルキメデスの奥で、かごめ、加奈、彩香はいつものように間食を楽しんでいた。

そこでかごめの携帯の着信音が鳴り、手にとって送信者を確認する。

画面上には「瑠璃」と表示されていた。

加奈と彩香を見ると、自分達の和菓子を食べ始めていたので、電話に出ることにした。

「もしもし？ どうしたの？」

『あつ、お姉ちゃん。あのね、お願いがあるの』

「無理。料理はできないよ。勉強も教えられないよ。洗濯はめんどうだよ」

『し、知ってるよ……』

うわっ。勉強のくだりも肯定するんだ。

かごめは自分のボケで自縄自縛になってしまった。

『そんなことよりもお姉ちゃん、今、或奇目死でしょ？』

行動パターンが読まれていることに少しムツとするかごめ。

あごに手を当て、鼻を鳴らした。

「ふん。さて、どうかな？ お姉ちゃんはまだ瑠璃の知らない悦楽の世界で」

かごめが虚勢を張った瞬間、ふすまが開いて、或奇目死の主人が顔を出す。

「おい、かごめ。今日のミルクフィードは美味いか！」

「もう！ もう、もうっ！ おっちゃんの馬鹿っ！！ タイミングよくでてくるなっ！」「しゅん……」

かごめと三倍近く年が違ふ主人が、がっかりを口に出すくらい落ち込んで帰っていった。

奥では女将が主人の頭を叩いた。

「ふふふ、待たせたね。ちょっと邪魔が入っ

「それでね、お姉ちゃん」

「ぐっ……無視された」

『悪いんだけど、ちょっと帰るのを一時間ぐらい遅らせてもらえるかなあ』

「え？　なんで？」

『実は明菜ちゃんに料理を教えることになっちゃって』

「アッキーナが来るの？」

『うん……』

明菜という言葉聞いてかごめの瞳が爛々と輝く。

彼女の脳裏には

『憂　さ　晴　ら　し』

という文字が頭に浮かんでいた。

「今すぐ帰るから！」

かごめの言葉に瑠璃が慌てた声を上げる。

『あのね！　たまには親友と二人きりでお話もしたいし！　それで

ね　』

『ばいばい』

『あっ、お姉ちゃ　』

瑠璃が言い終らないうちにかごめは通話を切ってしまった。

携帯を鞆にしまうと、加奈と彩香に向かって手をあげる。

「私、用があるから帰るね」

彩香は「あらあら」と驚き、加奈は首をかしげた。

「どうしたんだよいきなり。さっきの電話誰から？」

「ん？　瑠璃から。アッキーナが来るからって」

「誰だよ、それ」

「阪野の妹」

「え！？ 阪野君の……妹さん！？」

加奈は阪野という言葉を見逃さなかった。

かごめにはピキーンと音がして加奈の瞳が光ったような気がした。

加奈の手がわなわなと震えながらかごめへと伸びていく。

「か、かごめ。アンタ、阪野君の妹さんとも仲がいいの？」

「うん、瑠璃とアッキーナが仲良いからね」

お近づきになりたい！ できればお姉ちゃんのポジションを獲得したいっ！

加奈の頭の中でまだ見ぬ明葉が自分の胸へ「お姉さま」とか言っ
て抱きついてくる姿にヤキモチをやく将を想像した。

妄想に浸る加奈を見かねて彩香が質問を続ける。

「だから早く帰ってきてって言われたの？」

「違うよ。『アッキーナが来るから一時間ぐらい時間を潰してきて』
って言われたの」

「はあ？ お前ホントに仲がいいのか？」

一気に妄想からさめた加奈が突っ込みを入れる。

かごめは当然と言わんばかりに胸を張った。

「もちろん！ つーことで、じゃあ……」

「待てーい！」

加奈に背を向けたかごめの肩に手を掛ける。

「な、なに？」

「時間潰してって言われたのになぜ帰ろうとする」

「アッキーナを可愛がるためだよ」

「『かわいがる』の意味は一般的意味か？ それとも相撲の意味か
？」

「もちろん、すも……一般的意味だよ」

「……行かせるわけにはいかな」

阪野君の妹だと聞いて加奈は肩を掴む手に力を入れた。かごめはジタバタしてなんとか脱出しようと試みる。「嫌だ！ 行くんた！ 行くんた！」私だつて行きたいのにつ！ と加奈は頭をめぐらせた。そしてふと浮かぶ妙案。

「……しょうがないな。いいだろう、許可しよう」「なんで加奈カナに許可もらわなくちゃいけないの？」瞬間的に加奈の眼鏡が鈍く光り、かごめを冷たく見つめた。

「かごめ。お前、自分の立場をわかつてるのか？」

日曜日のことを思い出してかごめは眉間にしわを寄せた。

「ぐぬぬ……」

困り果てたような顔をしたかごめに加奈は小さくため息をついた。「かごめ、よく聞け。今帰ったら、瑠璃ちゃんとの約束を破ったことになるだろ」

「でも」

「いいのか？ 瑠璃ちゃんを怒らせて」

「……ライフラインが断絶される」

古賀家の家事洗濯はほぼ瑠璃が握っている状況で、怒らせることはかごめの生活にかかわるのだった。

以前、瑠璃を怒らせて一週間昼食を購買のパンで過ごしたことを思い出した。

もちろんパンの獲得競争に負け、ろくなパンを買えなかったことだ。

「そこでだ。良い考えがある。家に帰りたいんだろ？」

「マジですか！？ さすが加奈様、眼鏡様！」

「眼鏡言っな！ 良い考えとは……」

「なになに？」

かごめの注目を引きつけたところで、加奈はわざとらしく咳払いを二度三度繰り返す。

タイミングを計らってかごめへ提案した。

「私が古賀家へついて行くことだ」

「いっ……」

「あからさまに嫌な顔したな」

「だつてえ……」

「考えてみる。私がついていけば『いや』、私は駄目って行っただけどお、加奈様があ〜どうしても家によって行きたいとお〜おっしやるからあ〜』とか言えるだろ」

だが、かごめの反応は薄く、しかも加奈をジト目で見つめている。

「なんだよ」

「加奈ちゃん、それ私の真似？」

「脳みそ足りないところなんかそっくりだろ」

「ぎゃふん！」

ホントに「ぎゃふん！」って言った。

彩香は自分が置いていかれている事実には軽くショックを受けながら二人の心を読んだ。

『ふふふつ。これでかごめから阪野君の妹さんを守れば、仲良くなれるはず。そうなれば外堀が埋まったも同然。策士だわ私』

『ふふふつ、アッキーナを相手に憂さ晴らしいいいいいっ！』

二人の心を読んだ彩香は「面白そうだけど、巻き込まれたくはないなあ」と思った。

「いいよ。加奈ちゃん、その申し出うけた！」

「気にするな、親友のお前が困ってるのを見捨てられなかっただけさー」

加奈とかごめは力強く握手をかわす。

ここに薩長同盟ならぬ、かごカナ同盟が結ばれたのである！

「とこういうことで、彩香ゴメンね」

「う、うん別に良いよ〜（汗）」

各々の思惑を乗せて、かごめと加奈は明菜が待つ古賀家に向かうことになった。

一方、古賀家では……

「うっ……」

「どうしたの明菜ちゃん？」

「なんか寒気がした」

「大丈夫？ 今年の風邪は胃腸に来るらしいよ」

「風邪じゃない気がする……」

第十八席「玉子焼きなんて面倒くさい」ア コガレ

古賀家のキッチンでは瑠璃と明菜が料理の準備を始めていた。

「とえりあえず玉子焼き作ってみる？」

「え〜玉子焼きなんていいよ。スクランブルエッグでいいじゃん。そっちのほうが可愛いし」

「でも将さんは手抜きって思つかもしれないよ」

「そんなのアタシが言わせないから！」

胸を張って言う明菜に瑠璃は小さくため息をついた。

「もう、素直になりなよ」

「アタシはいつも素直ですが？」

「開き直りと素直は違います」

確かにできない・無理と開き直っても料理は上手くならない。

明菜は髪を指でいじりながら、口を尖らせる。

「もっとお手軽なのないの〜？ 野菜炒めとかさあ〜」

「将さんがそんなので感心するわけないでしょ」

瑠璃の言葉に明菜は指に絡まった髪を解き、腰に手をあて「よし」と呟いた。

「そうだね。料理の勉強するのはお兄ちゃ……兄貴を驚かせるためだったんだ」

「わかったら実践、実践。玉子焼きは基本的な料理だけど、下味がしっかりついていたら好感度は上がると思うよ」

「そうかなあ……ウチの兄貴はそこまで見ていない気がする」

普段は結構偉そうな口調で話す明菜だが、いざとなると小心者で自信のなさをうかがわせる。

瑠璃は明菜の性格をわかっているので、力強く彼女の肩に手を置く。

「大丈夫だって。』おっ、下味がしっかりついてる。こりゃ〜明菜

もどこへお嫁に行つても恥ずかしくないな』なんて言うかも」

明菜の顔は一気に赤くなり、大声をあげ頬に手をあてる。

もう片方の手は瑠璃の背中をバシバシ叩いていた。

「そんな恥ずかしいよ、嫁だなんて。バカじゃないの？ もうバ

カバカ、兄貴のバカ」 瑠璃はなすがままに叩かれたが、しばらく

して「コホン」と咳払いをした。

「妄想はそれぐらいにして作るよ」

「ほい」

スツカリやる気になっている明菜。 瑠璃は見事に彼女を懐柔したのであった。

「ねえ瑠璃、砂糖入れよう！ 砂糖！ 甘いをつくる！」

「別にそれでもいいけど、砂糖以外にも使おうか」

「え！？ 砂糖以外にも入れるものなの？」

「……が、頑張ろうね、明菜」

瑠璃は丁寧に明菜へレクチャーを始める。

明菜は卵を割り、中身が入った容器を懸命に泡だて器で掻き混ぜた。

「ぬおおおおおつ！！」

「あつ、駄目。かき回し過ぎだよ！」

「へ？ だってそうしないとちゃんと混ぜられないでしょ？」

「混ぜすぎるとふんわりできないよ。白身が玉で残ってるぐらいでいいんだよ」

「へ」

「本当はしょうゆや砂糖、塩で味付けしてもいいけど、今回はダシの素と砂糖でいいでしょう」

「へ、なんだか料理番組の先生みたい」

「勉強したからね。お姉ちゃん頑張るんだけど全然料理上達しなかったから」

「く、苦労してるんだ……」

今より少し幼い瑠璃が料理本なんかを見ながら懸命に料理を作る姿を想像して、明菜は微笑ましい気持になった。

「さっ、実際に焼こうか」

その後、四角いフライパンへ卵を流し込み、巻いていく。

「最初にまとめて入れて。強火だよ。ぐちゃぐちゃでいいから雰囲気丸めていって」

「ええっ!?!? それでいいの?」

「大丈夫、最後の卵で上手く丸まればOKだから。私を信じなさい」

「お、おう……」

なんだか瑠璃の言葉に従ってやると上手く行く気がする。

同じことを一人でやっても上手くいかない。二人だから上手くいくんだ。

明菜は瑠璃の真剣な表情を心強く思った。

「できた〜!」

湯気をまとう玉子焼きは、見た目もふんわりしているようで、目で成功したことがわかった。

瑠璃の指導のお陰だといえる。

「じゃあ、食べてみよっか」

「うん」

二人が玉子に手をつけたと同時に玄関から声が聞こえた。

「たっだいま〜〜〜っ!」

「お、お姉ちゃんだ!」

かごめの声が聞こえると明菜の肩がわずかに揺れた。

「やっぱり、帰ってきちゃったか……」

足音がキツチンへ近づいてくる。

よく聞くと足音の多さから一人でないことが瑠璃にはわかった。

「いや、加奈カナがどうしても日曜日の事件を謝罪したいって言うもんだからさあ」

「謝罪するのはお前だろ！」

キッチンに顔を見せた早々にツツコミを入れる人物。かごめ以外にも加奈があらわれたのだった。

明菜はかごめと目が合うと、少しだけ頭を下げ、小さい声で挨拶した。

「どうも」

「おいーす！ アッキーナ来てたんだ！」

「くっ……」

明菜はかごめから視線を外し、下を向いた。

努力の現場を見られたことに屈辱を感じている。

瑠璃は明菜の仕草でそう分析した。

しかし、明菜は再びかごめへ顔を向け、声をかけた。

「かごめ、何しに来たの？」

「いや、ここ私の家だし」

「……あつそ、じゃあ自分の部屋に帰ったら？」

冷たく言い放ち、明菜は腕組みをした。

「なに作ってるの？ うわっ、目玉焼きじゃん！」

「無視すんなよ！ それにこれは卵焼きだ」

「……どっちでもいいでしょ。どうせ卵なんだし」

「全然違うわっ！」

かごめは面倒くさそうに頭をかきながら、明菜に反論した。

「大体、なんで玉子焼きなの？ ス克蘭ブルエッグでいいでしょ。面倒くさい」

「同じ事いつてる……」

思わず瑠璃が口に出してしまふ。

明菜はすぐに瑠璃へと振り向き、涙目で応えた。

「瑠璃！ アタシ、玉子焼きをマスターする！ こんなヤツと一緒
にされたくない！」

「明菜ちゃん、その意気だよ」

「こんなヤツとはなんだ！」

下手なツツコミを入れた後、かごめは腕組みをして「ふん」っと
鼻を鳴らした。

「しかし、よく言った！ 私はその言葉を待っていたのだよ、明菜
君」

「嘘をつくな！ っていうか、お前は何様のつもりだ！」

「とんでもねえ、あたしゃ神様だよ！」

かごめがドヤ顔を明菜に向ける。

隣にいた加奈がかごめの背中をポンと叩く。

「志村くうしろくうしろ」

「へ？」

加奈が指差す方向へかごめが振り返ると、ほっぺを少し膨らませ
た瑠璃が立っていた。

「あわわわ……」

「お姉ちゃん」

「瑠璃神様がお怒りじゃあ……」

かごめには瑠璃が本当に怒っていることがわかった。

べ、弁当が作ってもらえない。明日のベントウーが！

はっ。ここは同盟関係を結んでる人に仲介してもらおう。

震える手を加奈へと伸ばす。

「か、加奈ちゃん助け」

しかし、加奈はもう隣にはいなかった。

「私、飯野加奈です。よろしくね、明菜ちゃん」

「は、はあ……」

すっかりかごめから離れ、明菜と握手を交わしていた。

加奈の勢いに明菜は気おされていた。

「あれと一緒にしないでね。私は貴方の味方よ。むしろ身内よ。お姉さんだと思つて頼つてちょうだい」

「い、いえ。私には姉がいますから」

「え？ お姉さまもいるの？ これは盲点だわ。小姑が二人も……」

「小姑？」

「いや、なんでもないので。私の将来の話」
シヨックを隠し切れないかごめはツカツカと加奈の前に歩いていく。

「ひどいよ、加奈カナ！ 裏切りだ！ 同盟解消だよ！」

すると「ふん」と鼻息でかごめの言葉をはらいのけると、加奈は明菜の肩に手を置いた。

「望むところ。たった今、カナ明同盟が締結されたところだ」

「あの、明つて私の名前が入ってない？」

「大丈夫、明菜ちゃん。私はいつだって味方だよ」

なんだか混沌としてきたなあ……

瑠璃はなんだか姉を怒るタイミングを失ってしまった。

加奈さんがいることで余計に事態が悪化している。

このままではろくな結果にならないと判断して瑠璃は一計を案じた。

よし。

「お姉ちゃん、明菜ちゃん。私にいい考えがあるの」

「「え？」」

「対決つてことどう？」

第十九席「玉子焼き戦争」ア 「コガレ

ここは古賀家。

瑠璃は友達の明菜へ料理を教えていた。

しかし、明菜の天敵、かごめが帰宅して妙な雰囲気。

そこで瑠璃は状況を変えるべく、一計を講じた。

「勝負？」

「そうだよ。お姉ちゃんも玉子焼きを作って美味しさで対決するの」

瑠璃の提案に一瞬静かになるキツチン。

しかし、かごめがすぐに声を上げた。

「え〜、面倒くさい」

「お前はなんでも面倒くさがるよな。勉強会とかさ」

「加奈カナ、いつまでも引つ張る女は好かれないよ」

「勉強会はお前が約……」

そのままの姿勢で加奈は黙り込んだ。

「どうしたの？」

「お前は私より機嫌を損ねてはならない人物がいるんじゃないのか」

「？」

「へ？ ……はっ！」

かごめの背後に口を一文字にして冷静に見つめる瑠璃が立っていた。

背中越しの雰囲気を感じたかごめは「ど、どうしよっかなあ……」

と震えた声で話す。ほぼ同時に隣からも声が聞こえた。

「アタシ、やる。だって自信あるもん」

「明菜ちゃん」

瑠璃は無表情から一変、喜びの声を上げた。

隣ではかごめがしばらく明菜をまじまじと眺める。

顎に手をあて、考える仕草をした後、「うん」と首を縦に振った。

「しょうがないなあ、やってやんよ!」

「決まりだね。明菜ちゃんのはもうできてるから、先に食べよ」

明菜が作った玉子焼きに皆が手をつける。

食べながら瑠璃と加奈から感嘆の声が上がった。

一際大声で賞賛したのは加奈だった。

「すごく美味しい!」

「あ、ありがとう」

「最高!っ! 玉子焼き最高!っ!」

「あの、飯野さん、ちよっ」

「完璧だわ。これパーフェクトだわ。お嫁にいけるわ。とっとと実家出れるわ。っーか出ちゃって」

「は? 今なんて?」

「と、とにかく美味しいってこと!」

玉子焼きを高々と上げて、褒め称える加奈。

明菜は加奈をジト目でみつめる。

「あの……ちよっと、わざとらしくないですか?」

「え? いやあ、オーバージェスチャーしちゃうぐらいの美味しさってこと」

「はあ。ありがとうございます」

加奈の背中を一筋の汗が流れ落ちる。完全に冷や汗だった。

訝しげに加奈を見つめる明菜に瑠璃が声をかけた。

「私も甘くて美味しいと思うよ」

「瑠璃、ありがとう!」

もぐもぐと口を動かしながら、無言で食べるかごめに瑠璃が話しかけた。

「じゃあ次はおねえちゃんだね」

「任せんしゃい!」

かごめは卵を数個冷蔵庫から取り出して、容器へと割っていく。

さらに泡だて器を持って天に掲げた後、卵をかき回し始めた。

「ふぬぬぬぬううううううっっ！」

「かごめ、かき回しすぎだ！」

急いで加奈が止めようとするが、狂ったようにかごめはかき回しを止める気配がない。

「はは……明菜ちゃんと同じことやってる」

「いやあああああっっ！ アイツと同じレベルなの？」

さんざんかき回した後、かごめは砂糖の容器を取り出した。

「玉子焼きなんてねえ、砂糖入れときゃいいの。砂糖！」

「また同じこと言ってるね」

「ううううう……」

かごめを指差す瑠璃に明菜は涙目になった。

あまりの適当な料理に加奈は心配になってくる。

「おい、ホントに砂糖だけなのか？」

「素材を生かす主義なの。だから余計な化学調味料は入れません」

「『入れられません』の間違いだろ」

加奈のツツコミが的確だったのか。かごめは勢いよく彼女を指差す。

「ふぬーっ！ もう同盟を破棄したんだから加奈カナは近づかないで！」

「わかったよ。けどこの前のしょうゆコーヒ―事件でもあるから、見張っておかないと心配なんだよ」

するとかごめは「なーんだ」といいながら笑顔で答えた。

「今回は大丈夫だから信じて。だって瑠璃も試食するんだよ。危険なことするわけないっしょ」

「……おい、今友達を傷つけてるぞ。気づかないのか？ 涙目だぞ私」

「とにかくあっち行って新聞でも読んでよ！ パパ気取りで読んでよ」

「よし、パパ読んじやうぞ〜……って、この私がボケてる？ しかも面白くない！」

かごめと加奈のやり取りを見ている瑠璃と明菜。

二人は口元を引きつらせながら先輩二人を見つめていた。

やがて瑠璃が明菜へ顔を向けると微笑んだ。

「結構似てるよね」

「誰が？」

「お姉ちゃんと明菜ちゃんだよ」

「は？ 全然似てないし。一緒にされたくないし」

瑠璃の言葉に少しムツとする明菜。

「上手く表現できないけど」と前置きをして瑠璃は説明した。

「お姉ちゃんは多分、明菜ちゃんが自分と似てるから、ちよっかい出したくなるんだと思う。可愛くてしょうがないんだよ」

「瑠璃？」

明菜は瑠璃の言いたいことに辿り着いていない。

さらに瑠璃は言葉を続けた。

「そして将さんも明菜ちゃんとお姉ちゃんが似ているから、お姉ちゃんも仲良くなったのかもね」

「お兄ちゃんが？」

お兄ちゃんがかごめと仲良くなったのは、私に似ているから？

っーことは、アタシのことを兄貴は……

明菜は自分の頬に手を当てた。……アタシ、熱くなってる？

「どうしたの？ 顔赤いよ」

「ななな、なんでもない。ふん！ アイツとアタシが似てるだなんて迷惑だっっーの！ 著作権料払え」

なんとか取り繕った明菜。瑠璃は彼女の顔を覗き込みながら「ふふふ」と笑った。

「なに？」

「なんもないよ。ただ、素直じゃないなあと思って」

「アタシはいつも素直です」

「できた〜っ!」

タイミングよくかごめの声が聞こえてきた。

かごめがみんなの前に出した料理は、黄身が半熟の……目玉焼きだった。

やはりいち早くツツコミを入れたのは加奈である。

「目玉焼きじゃねえか! かき混ぜてた卵はどうした!」

「気にしない気にしない。ちなみに目玉焼きへ味の素だけかけたら美味しいよって阪野が教えてくれたよ」

かごめの瞳が明菜に向けて光る。

まさか、食べさせる気じゃないでしょうね。

明菜はそっぽを向いて視線をそらした。

いくらお兄ちゃんのおすすめだからって食べるわ

「ブ ツ!!! まずうううっ!!!」

「加奈ちゃん、すごい! 食べた!」

「さ、阪野君。本当にこんなものを……」

加奈がシヨックを受けている隣ではかごめが皿に盛った玉子焼きをテーブルに置いた。

「……というフェイクは置いておいて、これが本当のかごめ作の玉子焼きだよ!」

「まさかの私、ピエロ役?」

瑠璃と明菜はさっそく玉子焼きに手をつける。

遅れて加奈も手をつけた。

「あれ?(お姉ちゃん、これは……)」

「むっ……」

瑠璃と明菜は一言ずつ発した後、無言で食べ続けた。

一方、一口食べた加奈はかごめを睨みつける。

「なんだこのフニヤニヤした食感は？」
「ああ、それ当たり前だよ。ポテチを入れたの」
「オムレツならいざ知らず、しょっぱいわっ！」
「えー、おふくろの味はいつも濃い目なんだよ」
「ありがとう、お母さん。ぶちのめしていいですか？」
「やんっ 加奈ちゃん、暴力的いいいいっ！」
「じゃれあうのはその辺にしてもらえますか？ どうして玉子焼きにポテチを入れようとしたの？」
加奈とかごめの会話に割って入ったのは明菜だった。
明菜にはポテチを入れた理由に当てがあつた。

「え？ ポテチ入れたオムレツが好きだって阪野が言ってたの事をアッキーナ見てたら思い出したの」

「なっ……（なんでアンタがお兄ちゃんの好みを知ってるの！）」
明菜は言いかけた言葉を飲み込んだ。

『美味しい玉子焼きを作ること』と『阪野将好みの玉子焼きを作ること』は似て非なるものである。明菜は言葉に出すと負けた気がして何もいえなかった。

「かごめ！ 何で今までそのことを隠してた！ 嫌がらせか？ 嫌がらせなのか？」

「ええっ！？ ちょっと、加奈カナがなんで怒ってるの！？ WH Y？」

複雑な表情の明菜に瑠璃が親指を立てた。

「とにかく勝負は明菜ちゃんの勝ちだね」

「う、うん……」

かごめと加奈の揉め事を眺めながら明菜は考える。

なんだか試合に勝って勝負に負けた気分。そうだよな。これはお兄ちゃんにあげる弁当の料理だもんね……古賀かごめ悔りがたし。

明菜は自分に似てることで一瞬気を許したものの、やはりかごめを好きになれそうにないと思った。

加奈と明菜が帰った後、瑠璃はかごめに声をかける。

「お姉ちゃん。玉子焼きだったら、昔私が教えたはずだよね？ どうしてあんな玉子焼きを作ったの？」

「へ？ 教えてくれたっけ？」

「もう……」

少し呆れ顔の瑠璃にかごめは笑いかけた。

「まあいいじゃん。妹がお兄ちゃんに何かしてあげようと頑張っているんだから。それでいいでしょ？」

「お姉ちゃん……うん。じゃあ明日は好きなおかず作ってあげるね

！ 何がいい？」

「カレーライス！（甘口）」

「え！？ また？」

その夜、阪野家にて。

将が自室に向かうために居間の戸を開ける。

丁度古賀家から帰ってきた明菜と鉢合わせになった。

「おかえり」

「ただいま……あ、兄貴」

「なんだよ」

下を向いていた明菜は将へと顔を上げた。

さらに将に向かって指を差し、宣言するように告げた。

「来週からの私の弁当に期待しなさい！」

「えっ？」

「今、無性に料理をしたい気分なの。ラッキーだね、兄貴は」

「おい、明菜、悪いけどさ……」

「ななな、なに？ 私の料理が食べられないわけ？」

「いや、違っつて」

将は申し訳なさそうに、明菜から視線を外し、頭を書きながら答えた。

「来週で二学期が終わるから午前中で授業が終わる」

「あ　　っ！」

「今気づいたのか？」

すると明菜の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「ばばば、バカっ！」

「うわっ、なんだよ急に！」

「冬休みなんて知ってるに決まってるでしょ！　バカじゃん！　調子に乗るな！」

「ええっ！？　調子に乗ってないし」

「バカ兄貴、もういい！　ふんっ！」

大袈裟に足音をたてながら明菜は歩いていく。

将にはなぜ妹が怒っているのか理解できない。

彼が首をかしげていると、急に明菜が振り返った。

「兄貴、来週はお昼にちゃんと帰ってきてよ」

「なんで？」

さらに首をかしげる将。

彼の態度に少しはなれて眉間を皺を寄せる明菜。

やがて、明菜の口元が震え、言葉が漏れた。

「バカ……」

「バカって……理由聞いたただけだろ？　なんでそんな」

将が言い終わらないうちにつかつかと明菜が近づいてきて、彼の胸元を掴む。

「私が昼食を作るからに決まってるでしょうが！」

「なんで怒り口調なの？」

「感謝しなさい。兄貴のためになんか普通は作らないんだかね。ふんっ！」

「ええ~~~~~っ」

来週、将が家に帰ると大量の玉子焼きが待っていることを彼はまだ知らない。

第二十席「エル・プサイ・コンゲルウ（特に意味はない）」ア コガレ

みなみの
南野まどかは妄想の人である。

期末テストが終わった放課後の校庭には部活動に勤しむ学生達の声が響いている。

校庭の外周を黙々と走る女子高校生が一人、南野まどかである。彼女は陸上部の長距離選手で今日も校庭をずっと走り続けている。

「まどか、勝負だ！」

まどかに声をかけ、併走する女子高校生は陸上部員の片瀬風子かたせふうこである。

彼女はまどかと同じクラスで、一方的にまどかをライバルと思っている。

しかし、まどかは彼女の呼びかけに反応しない。

「（くそっ、なぜ私を無視するんだよ。こんなにも競り合っているのに！）」

まどかは無視しているわけではない。

妄想に浸っているのだ。

南野まどかは走ることが大好きである。

ランナーズハイから分泌される脳内のアドレナリンが醸し出す夢の世界への招待状。

時には悲劇のヒロインに。またある時は世界の命運と握ったヒーローにさまざまなお話が彼女の頭を駆け巡る。

走っている間は邪魔するものは誰もいない。一人になれる時間がとても大切に思えた。本音を言えばずっとこのまま走り続けたい。

まどかは陸上部の中でもスピードタイプではない。長距離をただ淡々とスピードを落とさずに走れるタイプである。競り合った相手

はまだかが妄想に浸っていることを知らないのです、どんどんムキになる。

しかし、結局は根負けして競り負けてしまう。

今日の練習も風子が根負けして脱落してしまった。

風子は倒れこむようにゴールに辿り着いた。

「はあ、はあ、はあ……負けだ。まだか、お前の粘りはホント凄いな」

そこへ後輩が近寄り、驚きの事実を伝える。

「南野先輩はまだ走ってますよ」

「なっ……」

風子が顔を上げると、まだかは相変らずのスピードで校庭を周回していた。

「嘘だろ……」

「しかも笑ってますね……心なしか表情に不甲斐なさを感じるけど……」

期末テスト中に部活がなかったので、まだかは妄想を持て余していた。

今日から再開されるということ、いつも以上に妄想全開なのだ。表情も笑っているというより、だらしない領域まで進んでいる。

しかし、風子たちが妄想の事実に気づくはずもない。

「よく聞け、一年。笑顔はな、リラックス状態を生み出せるんだ。

まだかはすでに苦行を楽しむ領域まできている」

「す、凄いですね」

「ああ。まだかとは次元が違う。アイツはどこか別の世界に飛んでいるようだ……」

四つんばいになり、うつむく風子。

やがてグラウンドの土を掴むように支えた手が握られていく。

「だがアイツに負ける訳にはいかん！ 行こう！」

「はいっ！」

まどかの後を再び陸上部員たちが追っていく。

彼女は基本無口に加え表情も読めないのも、他の部員には近づきがたい存在なのだが、いつも一番練習をしているのは、まどかだった。

お陰でまどかは部員たちから尊敬される存在になっている。

だが、本人は妄想に浸っていただけである。

まどかの思惑とは別に皆が張り切るお陰で、陸上部の成績は彼女が入部してから右肩上がりだった。

「南野まどかを捕捉した！」

まどかに併走する女子高校生が一人。制服姿のままである。

だが、相変らずまどかは気にしていない。

女子高校生は「ふっ、やはりな」と呟いた。

「まどかよ、トリップしてるのか？ ならば……」

彼女はまどかの目の前で校門を指差した。

「あっ、軽音部所属で五人組の女子高校生が校門付近で仲むつまじく歩いてる！ まさにふわふわ時間っ！」

「っ！」

まどかはむちうちになりそうな勢いで校門へ振り向いた。

しかし、向いた先には誰もいなかった。

「ふふふ。お前は『業』から抜け出せぬようだな」

「……誰？」

まどかはようやく併走している人物に気づいて横を向く。

女子高校生は不敵な笑みを浮かべる。

「我が名は早乙女麗華。この高校で漫画研究会の会長をしている」

「ああ……三年四組の岡辺凜子さん」

「さすがだな、まどか。私の仮の名を知っているとは！ 真の名は

早乙女麗華だ。それにしても仮にとは言え、なぜ私の名を知っている？」

「……同人誌読んだから」

まどかの言う同人誌とは文化祭で漫研から販売した合同誌のことである。

凜子は瞳を大きく開き、ポンと手を叩いた。

「アア　　ッ！　うしいこと言ってくれるじゃないの！　それじゃあとことんまでつきあってもらおうか」

「つきあう？」

口端を吊り上げて、凜子は淡々と告げる。

「ああ、単刀直入に言おう。私の後継者にならないか」

「私……陸上部」

「辞めてもらうしかないな」

「……無理」

まどかが断るだろうということは凜子には織り込み済みだった。

しかし、面と向かって言われると少しショックである。

「え、マジ、マジ？」と素に戻って何度も聞いてしまう。まどかは何度も首を縦に振った。

凜子は食い下がるうと、説得を試みる。

「それにしてもなぜ走る？　まどかよ。お前にとっての本当の樂園は校庭ではないはず」

凜子が言っている樂園は校舎二階の空き教室に存在する漫画研究会の部屋である。

まどかは凜子をちらりと見ると、再び前を向いた。

「……走ると楽しいから」

「妄想なら、原稿用紙に叩きつければよい！　我が眼は誤魔化せんぞ。お前の走っている時の瞳は『闇』の光りを宿している」

「っ……」

南野まどかは漫画を書くことが大好きである。
普段はスケッチブックを持ち歩き、ことあるごとに落書きをして
いた。

落書きしている間も走っている時と似たような興奮があった。
まどかが一瞬眉間に皺を寄せたことを凜子は見逃さなかった。

「我が眷属よ。校舎の二階にはお前の楽園とも言える闇が存在する
ぞ。くつくつくつ、その様子では辛抱たまらんか」

「私は……」

「隠さなくてもよいよい。我が同人誌を読んだからにはお前にはも
う呪いがかかっているのだ！」

「呪い？」

「そうだ。予言しよう。来年の文化祭、お前は漫研で作品を発表し
ている」

「！？」

「どうだ、今少し興奮しただろ！ うわはっはっはっはっ！」

凜子は勝ち誇った笑みを浮かべている。

逆にまどかはあきらかに困った顔をしていた。

「あの、先輩」

「なんだ？」

「そろそろ、本気で走っていいですか？」

「へ？」

凜子の走るペースにまどかが合わせたせいで、ジョギング程度の
スピードに落ちていた。

事実を突きつけられ、まどかがスピードを上げたせいで、凜子は
一気に体力がなくなっていた。

しかし、なんとかついて行く。肩で呼吸をしながら。

「はあ、はあ……さすがはまどか。どうやら我が力もここまでのよ
うだ。やはり外の世界では実力の十分の一も発揮できんのか……」

普段運動をしない凜子にはすでに限界を過ぎていた。

追い討ちをかけるように後ろから陸上部の声が聞こえてくる。

「こらーっ！ 岡辺凜子！ ウチの部員にちよっかいをだすな！」

「ちっ、肉体だけがとりえの……はあ、はあ……下郎が」

凜子は携帯を取り出すと、自分勝手に話しだす。

「私だ。まずいことになった……はあはあ……機関の送り込んだ肉体馬鹿の襲撃を受けている。なあと、ここから抜け出すのは容易いさ……はあはあ」

凜子の一人芝居にまどかが心配になって話しかける。

「大丈夫ですか？」

しかし、凜子は携帯電話に話しかける姿勢を崩さない。

「大丈夫だ問題ない。すぐにそちらへ向かう。はあはあ……もどつたら一番いい薬を頼む……はあはあ……それでは。エル・プサイ・コングルウ（特に意味はない）」

携帯をしまつと同時に凜子は倒れてしまった。

まどかは振り向いて安否を確認するが、陸上部員に追いかけられ、逃げているところを見ると大丈夫のようである。

「負けんぞ。後継者はお前しかいないんだ！」

大声を上げて凜子は校舎へ消えていった。

まどかはまた一人で走り出した。

スピードを上げると周りの景色が飛んでいくように思えた。

この感覚はスケッチブックだけでは味わえない。

すかさず、妄想モードに入ると一人の世界に包まれる。

南野まどかは妄想の人である。

第二十一席「芸術家のサガ」ア コガレ

亜古賀鈴町の隅に位置する一軒家周辺が騒然とした。
燃え盛る一軒の家。

炎の勢いは音を立てて増し、家を駆逐していく。

野次馬達は家を囲むようにとある問答を見物をしている。

家の目前では数人の消防士と家主が言い争いを始めていた。

「燃えるー！ 私の作品が燃えるーっ！！ 早く消してくれ！」

家主は芸術家、海野冬彦つみのふゆひこだった。

彼の絵画、彫刻等、さまざまな作品を家に置いてあった。

売れば数百万で売れるような作品群。

自分の作品を溺愛していた家主は中々作品を売ることなく、家に保管していた。

「ご主人、そこどいて！」

消防士が家主を押しつけ、大きな消火用のホースを突き出す。

「なっ！」

消防士の姿を見た海野は一瞬で顔色を変えた。

なかなか水の出ないホースに消防士は後方へ叫び声をあげる。

「おい、何やってんだ早く水出して！」

放水ホースを目の当たりにして海野も負けじと叫んだ。

「させるか！！ 私の作品に水をかけるな！！！」

「痛っ！」

怒鳴る消防に向かって海野が肩口へタックルをかました。

体勢を崩し、倒れこむ消防士。

「俺の作品に何をすー！！！」

「えええええつつつ!!」

「絵絵絵絵絵絵つつつ!!」

「わあああああああああつ!!!!」

両手を空に向かって掲げて、叫ぶ海野。

その形相はすでに何度目かの昇天を迎えたかのような表情。

白目をむいて口からは涎が垂れ流れている。

近くにいた消防は海野からなにやら糸が切れたような音が聞こえた。

「ん？ 今、何か切れる音しなかった？」

「つつひよひよひよひよつ、燃えろ！ 燃えろ！ ファイヤー!!」

「こ、壊れた……」

叫び踊りだした家主をみてチャンスとばかりに消防士は後方へ指示を出した。

「よし、今のうちに水！」

「させんぞー!!」

再び消防士へ蹴りをかます家主。

さらに消防士の身体にしがみつき、動きを止める。

「なにするんだ！」

「消しちゃだめっ！」

「なんでだよ！」

すると海野は真剣な表情に戻り、大声で叫ぶ。

「もうすぐでガス管まで火が回るんだ！」

「ガス爆発で大変なことになるだろ！」

「いいんだよ」

「なんで!？」

海野はニヤリとして、ドヤ顔で言った。

「芸術は爆発だから」

「……は？」

時間が止まったように音が聞こえなくなり、二人だけの時間が経過する。

二人は数秒は見つめあった後、海野が一言。

「てへ」

海野が舌を出したところで、轟音が響く。

どおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！
衝撃はと同時に黒煙と高熱が辺りに拡散する。

野次馬は逃げ惑い、海野と消防士は空中に投げ出された。

後日、海野の最新作「芸術ガス爆発」が発表されたという。

第二十二席「ファッキンジャップぐらいわかるよ馬鹿野郎！」ア コガレ

ここは亜古賀鈴倉庫株式会社。通称アコ倉。

本社一階の営業課では阪野裕美さかのひろみと佐崎友里ささきゆりが留守番をしていた。

年末のこの時期、会社が経営する倉庫数箇所では大忙しで、営業課からも男性は皆応援に出動するのが常であった。

「友里、それにしても暇だね」

「まあ、ウチは年末の忙しさなんて関係ないからね。主に中国関係だし」

アコ倉は外国にも倉庫を展開し、裕美が在籍する課では中国の倉庫を担当していた。

「あゝ、今から旧正月が憂鬱だわ」

「旧正月前は駆け込みで忙しいからね」

「はあ……」

中国からの輸出品を扱っているので、日本に届ける期間を考える
と一ヶ月から二週間ほど日本の流れより早いのである。

つまり今は正月明けの荷物を扱っており、暇な時期にあたる。

上記の理由により、裕美にはある不満点があった。

それは……

「なんでウチの会社は忘年会がないの？」である。

友里はため息混じりに裕美に答えた。

「年末は忙しいんだからしょうがないでしょ」

「ウチの課は暇じゃん」

「他の課や営業所、物流センターは忙しいの」

「そんなんじゃないよ。はあ、やだねえ横並び主義は」

「しょうがないじゃない、今週は福袋の出荷が多いんだから」

口を尖がらせた裕美はそれでも諦めようとしなない。

「じゃあ、来週は？」

「来週つてもう今年終わるでしょうが。それに正月売り出し商品の出荷があるでしょ」「くそ、ああ言えばこう言うなあ。お母さんか？ 友里ママか？」

普段の仕事上では裕美はいたって丁寧な話し、業務態度も真面目だ。

しかし、同期の友里といる場合はついつい学生気分が抜けない。友里も呆れながらも、ちゃんと答えている辺り律儀である。

「阪野を育てた覚えはないよ。つーか、静かに留守番できないの？」「できない！ 女子だからって留守番にするなーっ！」

「そういつてはしゃぎ過ぎて午前中で力尽きた人もいたわね」

「力尽きた奴は誰だ、この馬鹿野郎！ ファツキンジャップぐらいわかるよ馬鹿野郎！」

「言つてねーし！ ファツキンジャップ言つてねーし！ 私も日本人だし！」

「いや、私はファニージャップだよ」

「阪野。ジャップも侮蔑の意味あるからな」

「えっ！？ ジャップつてジャパニーズの短縮形じゃないの？ ヤンキーみたいなものだと思つてた」

「止めような。真面目な人が聞いたら怒りそうだから」

さすがに空気を読んだ裕美は黙って机の書類に向かった。

しかし、我慢できたのは十分程度だった。

再び裕美が友里へ素面にもかかわらず、絡む。

「だいたいなんで今週が福袋の出荷なの？ おかしいじゃん時期的に」

「別に変じゃないよ。正月直前に出荷する方がおかしいわ」

「友里つて真面目ぶっちゃってさ。福袋なんか福はないよ！ あんなのは在庫セールの塊でしょうが！ 福は自分でつかむものよ！」

「あー、掴んで来い、掴んで来い」

「うわ、なおざり……」

裕美は腕組みをして考え込む。

友里は「もうこれ以上何も思いつきませんように」と願ったが、現実には甘くなかった。

「そうだ！」

手を叩いて友里へと視線を向ける。

無視しようとしたが、次の言葉で無視はできなくなる。

「せっかく誰もいないんだから、ここで忘年会しようよ」

「しないって」

「私、材料探してくるから！」

「ええっ!？」

勝手に動き出したらもう裕美は止まらない。

「ああ、誰か早く帰ってきて」と友里は願った。

しかし、今日は願ったことと反対のことが起こるらしい。

裕美がスキップしながら戻ってきた。裕美、ノリノリである。

「これがあった！」

「パ、パンダチョコレートじゃない！」

「え？ これがああのパンダチョコレート！」

「ええ。パンダチョコレートは営業課の五十嵐さんが中国主張で買ってきた土産よ。でも、そのあまりの不味さに誰もが一個でギブアップしたの。食べた人曰く『石油食べたみたい』だって」

「説明ありがと。っていうか、むしろ、食べた人に『石油食べたことあるの?』って聞きたい気分」

「ないよ。食べたことないよ」

裕美はそこで食べた人が友里だという事がわかった。

もう一言いっただら怒られそうな気がするので、裕美は聞かなかつたことにした。

「五十嵐さんは最近じゃあ、不味い土産物ハンターって呼ばれてる、

っていうか自称してるよ」

「自ら名乗り出るなんてたち悪い」

しかし、不味い不味いと言われたら食べたくなくなるものである。

裕美の好奇心に火がついた。

友里は裕美のうれしそうな表情を見て嫌な予感がした。

「じゃあさ、ジャンケンして負けた方がパンダチョコレート食べてくつてのはどう？」

「えー、嫌だよ。石油食べたくないし」

「石油 食べ た こと あん の ！？」

「裕美、スルーしていればよかったのに……いいでしょう。パンダチョコレートの怖さ、特と味わうがいい！」

パンダチョコレートと二人で内緒の忘年会という状況が裕美と友里のテンションを上げていった。

野球拳でもないのに二人は踊りながら、ジャンケンを始める。

「ジャンケンホイ！」

裕美がパーで友里はチョコキであった

「やったー、負けた！」

「食べたかったの？ ジャンケンする必要あったの？」

友里はパンダチョコレートを一掴みし、裕美の口へと運ぶ。

裕美もノリノリでパンダチョコレートを食べる。

「……モグモグ」

「どう？ 味は……」

しかし、裕美は口を賢明に動かして話そうとしない。

さらに額には冷や汗をかいている。

「ほら、言わんこつちやない」

友里の言うことを無視して、裕美は拳を上下に振っている。

どうやら二回戦をする気満々だった。

「わかったから。どうしても私に食べさせたいんでしょ」

友里も覚悟を決めてジャンケンにのぞんだ。

シャンケンは数度行なわれ、全て裕美が負けてしまうという結果になってしまった。

口いっぱいパンダチョコレートをはおばった彼女は顔面蒼白になっっていた。

「阪野、大丈夫？」

「せ……」

「せ？」

「石油食べてるみたい……」

裕美の言葉を聞いた瞬間、友里は指差して笑った。

「わはははっ、そらみる！ 石油だろ！ 石油食ったことあるのかお前は！」

両方の頬がパンダチョコレートで膨れたまま裕美は涙目で語る。

口にチョコレートが詰まっているせいで上手く喋れない。

「へきゆ（石油）でした……ごめんなさい。もう、へきゆ（石油）を八カ（馬鹿）にしません……」

「……んなリスみたいに、口いっぱいパンダチョコレート溜め込まれても」

「リフ（リス）とかハンダ（パンダ）とか動物ネタが被ってるよ」

「リス顔のお前に言われたくないわっ！」

その後、友里が大笑いする中、口から出すことも飲み込むこともできず、だんだんチョコレートが溶けていくのを待つしかない裕美だった。

溶けるチョコレート、広がる石油。

まさに生き地獄である。

「おまえら、喋り声が廊下まで聞こえてたぞ」

二人が急いで振り向くと営業課のドア付近に三十代半ばの男性が

立っていた。

「あっ、五十嵐さん」

「お前ら、人が働いていた時によくも……」

五十嵐は頭をかきながら二人に近づいてくる。

友里は叱られることを覚悟したが、裕美は立ち上がり、五十嵐に向かっていった。

「だ、だって忘年会ないじゃないですか！」

「いや、俺に言われても……」

裕美の迫力にすこし気おされた五十嵐。

別に自分もおちやらせ社員なので、怒る気はなかった。むしろたまにはいいかとさえ思う。

裕美はなんとか場を繋ごうと、五十嵐に質問した。

「つて言うかなんで応援から戻ってきたんですか？」

「いや、俺は応援じゃないから」

「へ？」

「出張だよ」

「まさか……」

裕美と友里が眉間に皺を寄せた。

特に裕美は苦いものを食べた後のように、口を歪めた。

「それにしても忘年会なんて考えなかったよ。ゴメンな」

「まさか、まさか！」

「その代わりと言っちゃあなんだが、お前たちにあげるよ。はい、お土産」

「ええっ!？」

お菓子が入っついていそうな小さな箱を手渡された。

友里と裕美は差し出された土産をのけぞるように拒否した。

五十嵐は「大丈夫、大丈夫」と言いながら、自信ありげに二人へ言った。

「中国のお菓子じゃないよ。今回はマカオの屋台で買ったお菓子だ

から」

「不味さは同じじゃい!!」

友里が思わず大声で突っ込んでしまい、裕美は勢いに任せて手元にあったパンダチョコレートを投げつけた。

「うわっ、パンダチョコレートを飛ばすなっ!」

「マカオが中国だつてぐらいわかるよ馬鹿野郎!」

首を左右に振り、肩を上下に揺らして裕美は啖呵を切った。

結局、五十嵐の土産は営業課のみんなへ均等に配られた。
肉体労働で疲れた男性社員にすこぶる不評だったという。

第二十三席「いつもの年末」ア コガレ

ここは古賀家。夕食を終え、寝るまでのマッタリとした時間。かごめは居間でテレビを見ながらくつろいでいた。

「ふむ。これからの季節はスペシャル番組が多くなって見る番組がなくなるなあ。特に年始」

「年始の心配よりまずは年末ということ。はい、お姉ちゃん」
キッチンで洗い物を済ませ、瑠璃が居間に入はいると、かごめにハガキの束を差し出した。

「おおっ、年賀状だね」

「お姉ちゃんいつも年始に送っちゃうでしょ。だから早いうちにね」

「さすが瑠璃、用意周到だね」

かごめは年賀状を受け取るとトランプのように扇型に広げた。

「さて、誰に送るべきか」

「お姉ちゃん、数に限りがあるからちゃんと事前に計画しないと駄目だよ」

「わかったよ。……そうだ！ 去年来た年賀状で決めようっと。瑠璃、去年の年賀状はどこ？」

「そう言うと思ってた。はい、お姉ちゃん」

「さすが気が利くねえ」

「毎年同じこと言ってるよ」

「え？ そうだったけ？」

去年の年賀状を受け取り、かごめは一枚ずつ吟味する。

「うーん、彩香ちゃんは達筆だねえ」

「お姉ちゃんも見習わないとね」

「ははは、やっぱりまどかちゃんの年賀状は和むなあ」

「まどかさんは運動もできるし、絵が上手いよね」

「確かによくよく考えると完璧超人なんだよね」

「お姉ちゃんの完璧の基準は体力と画力なの？」

「加奈力ナの『パソコンで作りました』みたいなものもなかなかこつてるね」

「でも、お姉ちゃんはもらった当時は激怒したんだよ。『気持が籠もってない』って」

「そんな『原稿用紙で書かないと気持が籠もらない』とかいう小説家みたいなこと言うわけないでしょ」

「もういい……」

ため息をつきながら瑠璃は自分の年賀状作りに集中した。

かごめは去年の年賀状を再び読み始めた。

「あはは、これこれ」

と言いながらコタツで横になるかごめ。

「これも良いねえ」

眠気まなこで年賀状を眺めながら、かごめはウトウトし始めた。

瑠璃は筆をとる手を止めた。

「お姉ちゃん、何のために年賀はがき見てるの？」

「え？ 暇つぶし」

「お姉ちゃん」

かごめはにらみの利いた瑠璃の顔をみるとすぐにものすごい速さで起き上がった。

「ご、ごめんなさい。住所を確認するためです」

「もう。掃除始めたらマンガ読み始めちゃって掃除できない人みたいなことしないでよ」

「え？ それが醍醐味じゃないの？」

「違います」

瑠璃は去年の年賀状を束ねるとワザとらしくトントンとテーブルを使って揃えた。

「お姉ちゃん。同じことを大掃除でもやらないでね」

「それはフリ？」

「お姉ちゃん」

「う、ウソです……」

ようやくやる気になったかごめは右手を高々とあげる。

「瑠璃、ふでペン持ってきて」

「まずは下書きした方がいいよ」

「え、下書きした後にはふでペンで書くと、後が残るよ。年賀状見た人が『下書きしてるよこの人』とか思っちゃうよ！」

「思わないって」

「思わなくても、私が負けた気になるから駄目っ！」

いつも変なところでこだわりのあるかごめに瑠璃は「どうして普段の事にこだわりの持てないのか？」と疑問になる。

とはいえ、今は姉を説得することを始めなければいけないと考えた。

「お姉ちゃん。もし間違つて失敗した年賀状はどうするの？」

「『年賀八ガキお年玉抽選』で再利用」

「じゃあ、外れたら？」

「瑠璃知らないの？ 書き損じは郵便局で普通の八ガキと交換してもらえるんだよ」

年賀状のことを忘れていたわりには細かいことを知っている、かごめはドヤ顔で瑠璃に答えた。

瑠璃はため息をつきながら姉の答えに反論する。

「五円手数料かかるじゃない」

「どうしてその情報を！？」

「それにお姉ちゃん官製はがきと交換しても使わないじゃない」

「使つもん！ 寒中見舞いとか暑中見舞いとか！」

「お姉ちゃん」

「はい……」

今回二度目の「お姉ちゃん」が出たところかかごめは肩をすくめた。

瑠璃は頬をかきながら、かごめを説得することにした。

「去年も同じやりとりしたよね？」

「う……」

「毎年、毎年ふでペン失敗してるでしょ？ そろそろパソコンで印刷にしたら」

「駄目だよ。気持籠もらないよ」

「原稿用紙にこだわる小説家？」

「道具にこだわるのは大切だよ？」

「年に一回こだわられてもねえ……」

かごめはジッと瑠璃を見つめた。

「瑠璃」

「なに？」

「最近、加奈カナっぽくなってきたよ」

「ええっ」

「っ！」

テレビの音量を遙かに凌ぐ瑠璃の大声が室内に響く。

かごめは驚いて肩をビクツと揺らした。

「あああっ、お姉ちゃん、ごめんなさい……言い過ぎた」

「……そんなに加奈カナと一緒にされるの嫌だったの？」

「そそそそ、そんなことないよ！ あー、良かったな、加奈さんと同じで」

「でも眼鏡かけてないから全然違うよ」

「私と加奈さんの違いって眼鏡だけ！？」

テレビ番組が丁度CMへ行く直前だったため、一瞬静寂が居間に訪れた。

すると口をとがらせて拗ねているのは、かごめではなく瑠璃になった。

かごめは少し慌てた。

立場が逆になってる……

「むーっ……」

「瑠璃？　じよ、冗談だよ」

「じゃあいいよ。好きなだけ年賀状書いて」

「そんなにムキにならなくてもいいよ」

「ムキーツ！」

「わわわ、瑠璃が壊れた」

腕組みしてそっぽを向いた瑠璃が片目をつむって、かごめを見る。

「どう？　これで加奈さんとは違うでしょ？」

「まだ気にしてたんだ……」

瑠璃は小さくため息をつくとかごめに笑いかけた。

「冗談はこれぐらいにして、年賀状は枚数気にしないで書いてね」

「おおっ、太っ腹！」

「はい、これ使って」

瑠璃は自分の手元にあつた年賀状を差し出した。

かごめは年賀状と妹を交互に見る。

「え？　これって瑠璃の分じゃあ……」

「いいよ別に。友達にはあけおめメールするから」

するとかごめは黙り込んで、瑠璃が差し出した年賀状を押し返した。

「……返す」

「だからいいって。さすがに年始年末の出費を考えると年賀八ガキにお金をかけることはできないから、これで我慢してね」

かごめは黙ったままつむく。

瑠璃はわかつていた。

かごめにはこの方法が一番効果的だということ。

「……ゴメン我がまま言つて。下書きするよ」

「ふでペンは止めないんだ」

「今年の流行だから」

まあ、いいか。このやり取りがあつて年末つて気がするから。

瑠璃はテーブルに肘をついて手で頬を支えると、嬉しそうにかごめを眺めた。

これがいつもの古賀家の年末である。

第二十四席「実家に帰らせていただきます」ア「コガレ

ここは亜古河鈴町にあるアパートの二階。

吉見和哉はよしみかずや阪野裕美さかのひろみの前へ正座で三つ指を立てて頭を下げた。

「俺、実家に帰らせていただきます」

「はあ？」

お菓子を食べながらテレビを見ていた裕美はポカンとした表情のまま和哉を見つめる。すると和哉が頭をかきながら、正座を崩して胡坐をかく。

「年末年始にさあ、久しぶりに地元の友達と会うことになってね」

「なめてるの？」

即答であった。

裕美の鋭い視線が和哉に突き刺さる。

和也の喉がゴクリと音を鳴らす。

「な、なめてません」

ジト目になった裕美が片膝を立てて完全尋問モードに入る。

和哉のパンツ見えるよというツツコミにも乗らず、裕美は淡々と言葉を発する。

「友達って、男友達？ 女友達？」

「どっちも一人ずつ」

「却下」

「そんなあゝ。高校時代、いつも三人で仲良かったんだよ」

する裕美の口にくわえていたお菓子がポロリと口から落ちた。

「和哉、それって、まさかのド、ドリカム状態！？」

「せめて『いきものがかり状態！？』にしようよ」

「なんで？」

「色々問題があるから。今は二人組だよドリカム」

「そっか……一人は薬でお縄についたんだっけ」

「はい。自主規制、自主規制」

和哉のツッコミで裕美は口を閉ざし、室内は空調とテレビの音だけが流れる。

「こ、ここは状況を打破しなければ。」

コホンと和哉が咳払いをして、裕美の注意をひいた。

「じゃあさ……俺の実家へ一緒に来る？」

「嫌。『じゃあさ』ってつけた段階で嫌」

「やっぱり！ 予想通りじゃん！」

和哉は胡坐をかいた自分の足を手で叩くと、いつもより少し大きい声を上げた。

「んじゃあ、どうすればいいんだよ！」

だが、裕美はまったく動じることなく、そっぽを向く。

「ここにいればいいでしょ。年末年始ぐらい一緒に過ごせないの？ 特別な日だよ」

「クリスマスにも同じような内容を聞いた気がする」

「そういう問題じゃないでしょ。諦めなさい」

いつもなら和也があっさり退くところで終わるのだが、今回は勝手が違った。

「クリスマスは一緒にいたんだからいいでしょ？ 大体、特別な日じゃなくても一緒に暮らしているんだから関係ないでしょ？」

「それで私を丸め込んだつもり？」

「……無理？」

「無理」

裕美はテレビへと向きを変え、和哉の話を聞かないよという体勢をとった。

和哉は頭をかきながら、小さくため息をついた。

「これは言わないでおこうと思ったんだけど……さっき言った友達

二人は来年結婚するの。俺に結婚の挨拶がてら会わないかって言うんだ」

和哉の言葉に裕美はテレビから視線を外さない。

しかし、返答はした。

「……それで？」

「なんかさ、こういう話題避けるじゃん」

「別に避けてないよ」

「まあ、俺もまだそんな気持ちじゃないし……」

「物書き志望のワナビのクセに調子に乗るな」

「つーか、少しは仕事もらってるよ！」

「エロ関係だろ」

「それは！……それはわかってるけど。エロだってお金をもらって仕事してんだよ」

再び、室内が空調とテレビの音に支配された。

特に二人は結婚の約束をしているわけではない。だがお互いがお互いにけん制しあう事で結婚の話題を避けるようになっていた。

口火を切ったのは裕美だった。

「アンタは駆け出してもいない物書き未満の身だし。私はペーペーの社員だし、こっちこそ結婚なんて考えられないつーの。重く考えちゃってさ、キモッ」

「あ……そうなんだ。それならいいけど」

「ふんっ、バカじゃないの？」

大学時代からの付き合いで、卒業後、フリーターとしてフラフラしていた和哉の元へ押しかけ女房のように裕美が転がり込んだのが同棲の始まりだった。

裕美自信が大学卒業後、生活サイクルが変わっていく二人に危機感を感じて同棲に踏み切ったというのが真相だ。

裕美はあからさまに舌打ちをした。

「チツ。どうしてもっと、上手い嘘ついて実家に帰れなかったの？」
「嘘ついても追求するくせに」

「もういい。行けば」

「ごめん」

「なんで謝るの？」

「『ごめん』って言ったことに『ごめん』」

「だから、何で謝るの？」

「『ごめん』って言ったことに『ごめん』って言ったことに『ごめん』」

「もう面倒くさいから、それ以上言わなくてよし。とっと行っちまえ」

この程度のケンカは何度か繰り返されていた。

慣れっこのつもりだが、良くない雰囲気のまま数日間二人が離れたままになるのは初めてだった。

「じゃあ俺、今からバイトに行くけど、帰ったら準備して出るから」

「早く消えろ！」

「はいっ！」

駆け足で和哉は部屋を出て行った。

一人残された裕美はテレビを見つめながら呟く。

「年を越える瞬間を一緒に超えないなんて馬鹿じゃないの」

裕美と和哉のケンカの余波を受けたのは阪野家だった。

居間のソファーに寝転びながらテレビを見ていた阪野将^{さかのまさる}だったが、テーブルに置いた携帯電話が不意に震えだした。

携帯電話をとって誰からの電話か確認する。

すると将の表情が厳しくなった。慎重に電話にでた。

「もしもし？ あっ、姉ちゃん。どうしたの？ ……えっ!？」

姉からの電話で一方的に「はい」と返事をする将の姿を、妹の明菜が居間に入ってきて目撃する。

「なに声出してるの？ キモいんですけど」
丁度、通話が終わったらしく、将は携帯をテーブルに置くと、眉間に皺を寄せて深刻そうな表情を見せる。

「明菜。停戦だ」

「は？ 何言ってるの？」

「いがみ合ってる場合じゃねえ」

「はあ？ 私がアンタといがみ合ってるって？ バ、バカじゃないの？ アンタを意識したことなんか一度も……」

赤くなる明菜を見ようとせず、将は言葉を遮った。

「そんなことはどうでもいいんだよ」

「どうでもいいって、なんなの！？」

「帰ってくる……」

「へ？」

不思議そうに眺める明菜をゆっくり見定め、将は電話の内容を告げた。

「姉貴が明日から帰ってくる」

「ええ っ！！」

明菜は大声をあげた後、口をパクパクさせた。なかなか言葉が出てこない。

数秒後、やっとのことで将に質問ができた。

「ま、まさか吉見さんと別れたの？」

「いや、和哉さんは実家に帰省するらしい」

「……ゴクリ」

明菜は喉を鳴らして冷や汗が流れる額をぬぐった。

さらに何かを思い出したように瞳を大きく開く。

「きゃーっ！ アタシ、お姉の部屋にガラクタを置きっぱなしだった！」

「くそっ、またあの絶対姉政が戻ってくるのか！ 搾取されるだけ

の日々が来るのか!」

「バカ兄貴! ほさつとしてないでお姉の部屋の掃除手伝ってよ!」

「和哉さん、なんで実家に連れて行ってくれなかったんだよおおお
おおおっ!」

和哉の帰省で一番割を食ったのはこの二人のようである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2105p/>

ア コガレ

2010年12月28日12時11分発行